

魔剣使いは極度の苦勞人

詠海だよ

※【痛いのは嫌なので防御力に極振りしたいと思います】の二次創作です。

初作なので文章構成の下手さは目を瞑ってけると助かります。

あと、他作品ネタバンバン使うので注意。

作者はハマった作品のネタをすぐに使います。

まるで空腹の時にご飯を与えられた犬のようだ。ハツハツハ。

お気に入り登録、評価してくれるとテンション上がって投稿速度が早くなります。

5月16日：タイトル変更。

変更前タイトル・魔剣手に入れたのでNo. 1目指して頑張ります。

目次

ゲームログインのその前話	1
初陣、レインの実力	3
ボス戦、そして装備GET!	8
魔剣使いと友人関係?	19
魔剣使いと第1回イベント	23
魔剣使いと苦手分野	29
魔剣使いと一層ボス	38
魔剣使いと第2回イベント①	49
はあああああ!?!ふざっけんなよ○ね!	59
俺がお前らに何をしたって言うんだ!	65
この運営、嫌い	73
どうも、《特級フラグ建築士》レインです。	81
手の平くるっくるですが何か?	92
弾丸	99
閑話休題	111
閑話休題②	114
お前も人外だ	124
そう、DO☆GE☆Z☆A☆です。	129
運営の受難	135
ぼかあ悲しいよ	137
真面目にやろう?そろそろ	141
唐突な変人出現。勘弁してほしいね	144

ゲームログインのその前話

「はあ、ようやく買えた…」

俺、雨宮 菜月は1つのゲームソフトの前で溜息を吐いた。

そのソフトのパッケージは、

〈New World Online〉と鮮やかな文字で書いてあり、
剣や杖を持った男女が数人描かれていた。

このゲーム、実は一度シヨップに並んで買おうとした時に目の前で
売り切れるという悲惨な事件によって買うのが遅れてしまったのだ。

「よし！早速キャラ設定するか」

そう言った瞬間、電話がかかって来た。

「ん？…ああ、白峯さんか」

スマホを取り、電話に出ると。

『もしもし？もうインしてみた？』

早速いつもの元気な声で聞いてくる。

白峯さんとはゲームの話題で仲良くなった。なんでも、大会で賞を
貰うほど強いんだとかなんとか。

「まだ。今からキャラ設定するよ」

『いいなあー、私も早くやりたーい！』

彼女、前回のテストの結果が良くなかったらしく、ゲームしてない
で次のテストに集中しなさい！と母親に言われたらしい。だから今
はゲームが出来ないということだ。

「知り合いいないし、次のテストまでソロかな」

「あ、それなんだけどき、楓も今からログインするらしいからVRMM
Oの勝手を教えてあげてくれない？」

「かえで？えーつと…どちら様？」

「本条楓。いつも私と喋ってるでしょ？誘ったの」

あの人ゲームしなさそうだなとか考えてたからなんでかと思った
が納得した。白峯さんのお願いは何故か断れないのだ。俺だけじゃ
なく。みんな…

「分かった。取り敢えずフレンド登録しとくよ」

「よろしく〜!」

電話を切る。そして、机の上に置いてあるハードに電源を入れる。「武器もステ振りももう考えてるしな…あとは名前…名前かあ…」

しばらく考えたが…

「よし、もういつものでいいや」

…考えるのが面倒になった。

そしていよいよ電脳世界へとダイブすることになる。

一度目を閉じたら、次に開いたときは、そこは既にゲームの世界。と、言ってもキャラ設定をまだしていないので、すぐに冒険だ!ε

〓／〓○ノヒヤツホー!!!という訳にはいかないのである。

「まず名前…やっぱりめんどいしいつもので」

?レイン?それがこの世界での俺の名前だ。

…いや、まあ…うん。単純だとは思ってる。でも俺ネーミングセンス皆無なんだよね…

そして名前を決めると、次は初期装備を決めることになる。

「武器は片手剣だな、やっぱり。使い慣れてるし」

初期装備を決めると、ステータスを割り振る画面が現れた。

「これももう決めてるし、ちゃちゃつと済ませちゃお」

ステータスを振るのは、どうするか決めていたから直ぐに終わった。

ちなみに、最初はステータスポイントが100貰えて、それを、

HP (体力) MP (魔力) STR (力) VIT (防御力) DEF (器用さ) AGI (素早さ) INT (知力) に好きに割り振ることが出来る。

「よっし、これで」

すると、自分の体が眩い光に包まれ思わず目を閉じる。

そして、次に目を開けた時。

そこは活気あふれる城下町の広場だった。

初陣、レインの実力

「おお…こんな感じなんだ。っと、ステータス」

ヴォンという音と共にレインの前に半透明の青いパネルが浮かび上がる。

レイン

Lv1

HP 40 / 40

MP 12 / 12

【STR 40 (+15)】

【VIT 10】

【AGI 40】

【DEX 10】

【INT 0】

装備

頭 【空欄】

体 【空欄】

右手 【初心者片手剣】

左手 【空欄】

足 【空欄】

靴 【空欄】

装飾品 【空欄】

【空欄】

【空欄】

スキル

なし

「よし。本条さんと合流したらレベリング行ってみるか！」

「あのみ」

「はい？」

「もしかして、雨宮くん？」

結構小さい、黒髪で初期装備の大盾を持った女の子が話しかけてき

た。

「この子が本条 楓さんだ。」

「あ、本条さん。こつちではレインね」

「うん！分かった！私はメイプルね！」

「よし！まずはレベリング行こつか。どんな感じにステ振ったの？」

「えつとね！ステータスポイントは全部防御力に振ったよ！

what??

聞き間違いかな…？なんか全部防御力って聞こえたんだけど。

「ちよ…ちよつともう一回言ってくれない？」

「？全部防御力に振ったよ？」

………はい？

「えつと、どうして？」

「痛いのが嫌だったからだよ〜！」

はい？ (二度目)

「あ、私モンスターが出るところ聞いてくるね〜！」

「わ、分かった…」

なんだあれ!?!白峯さんに聞いてはいたけど限度があるだろ!!!!!!

そして、メイプルさんが情報聞いて、帰ってくるまでの間ずつとど

うするか考えていた。そして出した結果は……………

「聞いてきたよ！西の森に行けば…………… どうかしたの？」

「いやー凄いなーって (棒)」

思考停止

考えるのがバカバカしいくらい凄いな…ホントに。え？いい意味

か悪い意味か？んなももん自分で考えろ。(辛辣)

まあ、そんなことはどうでもいいとして、ただ今絶賛問題発生中だ。

問題というのはもちろんメイプルさんのAGI。

0だよ？0。

大事なことなのでもう一度言います。0。

つまり歩くのが超遅い。そして、俺は数分後、我慢の限界に達した。

「…失礼！」

「えつ、わひやつー！」

もう速度合わせるのに疲れたから俺が運んじやえってね。
つまり今、おんぶ状態。

そして歩き出して5分、ようやく森に着いた。

「いきなり過ぎてびっくりしたよ〜」

「ごめんごめん。でもこっちの方が速いでしょ?」

この森、初心者のレベリングにちょうどいいそうさ。ここでレベルを15くらいまでは上げたいな。

「よし、行こう!」

「おー!」

数分後

「うん、この辺でいいかな」

俺たちは、森の少し奥辺りに来ていた。

「よーし!モンスターさん!どこからでもかかってくるよー!」

「どこからでもはダメだからね!」

俺がメイプルさんの天然発言にツツコミを入れたその瞬間、その声に反応したのかは分からないが、草むらから尖った角を持った白兔が草むらから飛び出してきた。

そして、白兔はかなりのスピードでメイプルさんに突進をした。

「うわっ!痛つ:く、ない?」

「メイプルさん大丈夫?」

俺はもうこの時点で攻撃が入ってないことが分かってはいたが、思わず心配してしまった。

「おおおおっ!痛い!痛くない!流石は VIT 128!ふっふっふ:どうだ兎さん!私の腹筋は?」

まあ、だよなあ。

大丈夫そうさ、と思ったため、俺は。

「別行動しようか。二時間後くらいに戻ってくるから」

「うん!分かった!気をつけてね〜」

「そっちなね!」

こうして、俺たちは別行動を取る事になった。

〈三人称視点〉

レインは、森のかなり深くまで来ていた。

気分を戦闘モードに切り替える。

そして、目を閉じ、集中し敵の気配を探る。

「…集中！」

ガサツ、と後ろの草むらから音がした時、レインはもう動いていた。

「…ふっ！」

気合いを発し、目にも止まらぬ速さで背から剣を抜き放ち、一閃。

レインが切り裂いた巨大蜂は、声にならない悲鳴を上げながら光と
なって消えた。

「よし…さすがにこの辺のモンスターは大した事ないな」

そんなことを言いながら、背中の鞆に剣をしまい、更に奥に進んで
行った。

この後、その辺のモンスターをほとんど狩り尽くし、レベルが16
になったんだとかなんとか。

そして、その光景を見たどこぞの名無しの大盾使いさんは、それは
もう凄い驚いたらしい。

【NWO】やばい初心者発見した

1 名前 : 名無しの大盾使い
やばい

2 名前 : 名無しの大盾使い

k w s k

3 名前 : 名無しの魔法使い

どうやばいの

4 名前 : 名無しの大盾使い

初期装備で無双してる奴がいた

5 名前 : 名無しの大盾使い

モンスター10匹以上に囲まれたのに見た限り無傷

6 名前：名前の大剣使い
は？

7 名前：名無しの弓使い
マジで？

8 名前：名無しの大盾使い
マジ。俺も隠れてたけど何故が見つかった

9 名前：名無しの魔法使い
VR慣れしてるのかも

10 名前：名無しの片手剣使い
あー

11 名前：名無しの大剣使い
そうかもな

と、言う具合に、気付かないうちに自分が話題になっているなんてこと、レインには知る由もない。

ボス戦、そして装備GET!

レイン

Lv16

HP65

MP12/12

【STR 60 へ+15 へ】

【VIT 25】

【AGI 60 へ+5 へ】

【DEX 10】

【INT 0】

装備

頭【空欄】

体【空欄】

右手【初心者の片手剣】

左手【空欄】

足【空欄】

靴【初心者の靴】

装飾品【空欄】

【空欄】

【空欄】

スキル

【状態異常攻撃Ⅲ】【パワーアタック】

【スラッシュ】【疾風切り】【電光石火】

【疾風一陣】【太古の一撃】エンサント・ストライク【筋力強化・中】

【連撃強化・中】【体術Ⅲ】【片手剣の心得Ⅲ】

【体捌き】【気配遮断Ⅲ】【気配察知Ⅲ】

【しのび足Ⅰ】【跳躍Ⅱ】

【毒耐性小】【料理Ⅴ】

【電光石火】

このスキル所持者のAGIを二倍にする。
取得条件

自分よりAGIが二倍以上高いモンスターから逃げ切る。

(このスキルは、メイプルと合流する時、追ってくるモンスターから逃げ、途中で曲がりまくったりしてモンスターを撒いた時に取得した。)

【疾風一陣】

五分間に一回、加速することが出来る。

取得条件

敵の攻撃を30分間避け続ける。

【エンシエント・ストライク太古の一撃】

何もかもを貫く刺突攻撃を使うことが出来る。

クールタイムは10分間。

取得条件

一回の刺突攻撃でモンスターのHPを全て削り切る(それを連続で五回行う)

(ここからほんへです)

俺は今日もNew World Onlineにログインする。
その理由はまあ、自分のレベル上げもあるが…

「今日も来るって言ってたし、本条さんこのゲームハマったのかな？」
そう。本条さんが今日もログインすると言っていたから、待ち合わせをしているのだ。
そして俺がゲームを開始すると、

「あれ？メイプルさん居ないな、まだ来てないのかな？」
待ち合わせ場所の噴水にはメイプルさんが居なかった。
思わず、周りを見渡すと…

「はい！その大盾格好良いですよね！」

「あ、ああ。それはどうも…」

赤い大盾を背負った、困惑気味の人と話している、メイプルさんがいた。

え？…どういう状況？なんかあの人困惑してるし…あつ、あの人昨日森に居た人じゃん。まあ、取り敢えず声掛けてみよ。

「メイプルさん、何してるの？」

「あ、レイン君！格好良い装備はどうやったたら手に入るんだろうって思ってた聞いてたの！」

「あー…」

なるほど。俺らまだ初期装備だからね。装備欲しいよな…。

「えつと、これはオーダーメイドだよ。生産職の人にお金を払って作って貰うんだよ」

「むむむ…成る程…」

「そうだな…紹介してあげようか？」

「っ！ぜひお願いします！」

「あ、僕もいいですか？」

「もちろんさ」

「マジか…まさか話題になってる二人ともに話しかけられるとは…：…後で掲示板に書こう」

そう、俺は後で知ることになるが、この人は俺たちのことについてよく話してる掲示板の、名無しの大盾使いだったのだ。

いつも通り（ではないが）やはりメイプルさんを俺がおんぶして移動する。移動中、通りがかかる人達の生暖かい視線が痛かった。

しばらく歩いた所で一軒の店に入る。

中には女の人が一人カウンター越しに作業をしていた。

「あら、いらつしやいクロム。その二人は？」

「ああ、ちよつと大盾装備の新入りを見つけてな、衝動的に連れてきた。で、こつちは…」

「この子…メイプルさんとパーティを組んでるので、付き添いみたいなものです」

そう言ったクロムさんと俺の後ろから、メイプルさんが姿を見せる。

「あら、可愛い子ね……クロム、衝動的にこの子を連れて来たの？通報した方がいいかしら？」

「そう言つて、店主の女性が青いパネルを空中に浮かべる。」

「え、通報しようとしてんの？運営に？クロムさん垢BANされるよ？」

「ち、ちよつと待てよ！それは、何ていうか言葉の綾だつて！」

「ふふつ、分かつてるわよ。冗談冗談」

「はあ…心臓に悪いから止めてくれ」

「クロムさんはそう言つてホツと息を吐く。」

「あなたも怪しい人にそんなに簡単にについていっちゃ駄目よ？」

「そうだよ（便乗）」

「あつ…分かりました」

「俺は怪しくねーよっ!？」

「漫才か？それも夫婦漫才。」

「ふふつ…それで、本題は？」

「この子が格好良い大盾が欲しいつて言うから、顔見せだけでもさせておこうと思つてな」

「なるほどね…私の名前はイズ。見ての通り生産職で、鍛冶を専門にしているわ。調査とかもできるけどね」

「あつ、私はメイプルつて言います！」

「俺の名前はレインです」

「メイプルちゃんにレイン君ね。メイプルちゃん、大盾を選んだのはなんでかしら？」

「えつと、痛いのは嫌だったので防御力を上げようと思つて…」

「いつ聞いてもすげえ理由だなオイ。」

「なるほどなるほど。じゃあVIT特化装備が良さそうね…ただ最低でも100万Gはいるけど」

「100万か…今の俺達じゃやっぱり到底無理だよなあ…」

「所持金は幾らだ？」

「うつ…まだ3000Gです…」

「俺も5000しか無いですね」

「ふふつ、それじゃあ足りないわね。まあ気付いた時には貯まってる物よ?」

「やっぱりダンジョン潜るしかないか。俺も装備欲しいしな…」

「うぐぐ…しばらくオシヤレはお預けかなあ…」

「まあ始めたばかりだとそんなもんだよ」

地図を指さし、イズさんがメイプルさんに向かってレクチャーを始める。

「東に、毒竜の迷宮があるわ。そこになら、いっぱいお宝があるわよ。ちよつとモンスターが強いけどね?」

「その内、行ってみるといい。運が良ければ、何か装備が手に入るかも知れないぞ」

俺は地図を見ていて、気になったことがあったので、二人に聞いてみた。

「あの、このゴーレム?が描いてある所って?」

二人は顔を見合わせて、揃えて洗面を作った。

「そこはゴーレムのボスがいるんだけど、恐ろしく強くて、まだ誰も倒したことがないんだ。まだ行かない方がいいぜ。現時点最強プレイヤーも負ける程だ」

「へえ」

結構興味あるな…強い敵とも戦ってみたいし、後で行こ。

「色々ありがとうございます!」

メイプルさんが目を輝かせている。早くダンジョン探索に行ってみたいのだろう。

「せっかく知り合っただし、フレンド登録しておきましょうか。そうすればいつでも連絡がとれるから」

「はい!クロムさんもいいですか?」

「おう。ついでに、俺のポジション分けてやるよ」

この人が優しい人でよかった…メイプルさんが騙されたりしないか不安だし、ちゃんとネットゲに関することを教えなきな。

こうして、二人とフレンド登録をして、別れた。さて…

「メイプルさん、今日も別行動で。ダンジョン行くんでしょ？」

「うん！レイン君はどうするの？」

「俺は、さつきクロムさんたちが言ってたゴーレムの所に行ってみる」

そこで一度言葉を切り、

「お互い頑張ろう！」

「うん！頑張ろう！」

そして、メイプルさんとも別れ、さつき買った地図を見ながら、ゴーレムのマークに向かう。

そして、五分後…

「よし、着いたか」

そのゴーレムは、もはや倒せないという固定概念が付いているようで、挑戦者は俺以外誰もいない。

そんなに強いボスに今から挑戦するのだ。難易度最高クラスだからこそ燃えてくる、というヤツかな。白峯さんが言いそうだ。

ソイツが居るであろう空洞の前には恐らくプレイヤーが立てたと思われる看板があった。

「えーと、なになに…『死ぬ覚悟はあるか』…もちろん、ある」

まあ、そうやすやすと死ぬつもりはそうそう無いけどな…

そんなことを考えながら、洞窟へと踏み込んだ。

レインが空洞の中央辺りまで来た途端、レインの目の前でポリゴンが集まり、モンスターとして実体化して行く。

実体化したそのモンスターを見た途端、レインは思わずこう思った。いや、口に出した。

「氷のゴーレム…か？炎系の魔法でも覚えてくれば良かったな…」

なんて言ってるガツカリしているが、MPは初期値から上げてないし、INTは0だ。そんな魔法が通じる訳が無い。

しかし、直ぐに気持ちを切り替え、敵を見て、動き方を伺う。

見た瞬間、ゴーレムの体の胸あたりに穴が空いていて、そこに球体の、核のような物を見つけた。

「あれが弱点っぽいな…」

しかし、あの球体を攻撃するならば、零距离まで近付かなくてはいけない。ならば、とレインは動き始める。

「まずは攻撃パターンを掴む！」

作戦は、相手の攻撃パターンを知り、その攻撃の隙を見て攻撃。至って

シンプルだが、これが一番安定しているのだ。

まずゴーレムは、その腕力に物を言わせて、致死の威力を持つパンチを放った。しかし、AGI特化型のレインが避けるのは容易い。

何度も回避しながら、考える。

(パンチしかしらないはずが無い。パンチだけだったら簡単に避けられるし、倒せない訳が無い。何か別のことをしてくるはず…)

その予感、直ぐに的中する。

急にゴーレムがなんの前兆も無しに氷ブレスを吐いた。

「なっ!？」

レインは一応、ブレスを吐いてくるかも、とは思ってはいたが、前兆無しだとは思っていなかった。

しかし、色々警戒していたからか、反射的にAGIに物を言わせて跳び上がり、ブレスを回避した。

だが。

ゴーレムのAIは、それを狙っていた。

空中に跳び上がって動けないレインに、拳が向かってくる。

「くっ…い…」

剣を前にかざし、直撃は防いだが…

当然だが、金属が悲鳴を上げ、剣が折れる。

そして、これも当然だが、直撃を防いだとはいえ、パンチの衝撃は防げない。中央で戦闘していたが、空洞の端まで吹き飛ばされ、岩壁に激突。

「がっ…」

レインは自分のHPゲージを見た途端、驚愕した。なんと、レインのHPは残り一割程度まで減少していた。直撃は防いだのだ。しかしそれでもほぼ即死。

攻撃に当たった瞬間死亡。
普通ならそれで絶望するだろう。

しかし。

レインは、笑っていた。

それも、諦めの笑みでは無く、好戦的な笑みだった。

「ハハッ……1回でも攻撃食らったら終わり、か。面白い！」

ドスドスと音を立てて距離を詰めてくるゴーレムを見据え、替えの剣をストレージから出し、構える。

「うおおおおおあつ！」

そして咆哮し、なんと正面から突っ込む！

ゴーレムはレインが自暴自棄になったと思ったのか、無造作に拳を突き出す。

その拳を、レインはスライディングし、くぐり抜けた。

そして、ゴーレムがパンチした後のごくわずかなテイレイをレインは見逃さない。

一瞬ゴーレムの体が硬直した瞬間、残っていた僅かな距離を詰め、弱点へと跳ぶ。

「う……ああツ!!」

狙うはゴーレムの心臓部分である核。

そこを、一撃で破壊する！

「エンシエント・ストライク太古の一撃ッ！」

渾身の一撃を放ち、ゴーレムにその必殺の剣が触れた途端、ゴーレムの体は崩れ、光となって消えていった。

「ぐえっ……」

情けない声を出して落ちてきたレインは、不幸なことにその落下で気を失った。しかし、システムの声が響いた瞬間飛び起きた。

『レベルが38に上昇しました』

「は？」

『スキル：【フリーズドブレス】を獲得しました』

「えちよ、ま」

『スキル：【永久氷塊】を獲得しました』

「な、何それ…」

『スキル：片手剣の心得がⅢからⅤに進化しました』

「いや、それは嬉しいけど…」

アナウンス、というかシステムの声はそれで終わった。

「な、何が何やら…取り敢えず、スキル見てみよ」

【フリーズドブレス】

MPを使わず、武器からあらゆる物を凍らせる、ブレスを放つことが出来る。

取得条件

氷結ゴーレムを倒す。

「え…つつよ…」

思わず叫ぶのも無理は無い。

MP無しで擬似的な魔法を放てるのだ。なんて素晴らしいスキルなんだ、とレインは考えていた。

【永久氷塊】

このスキルの所有者が出す氷は、破壊不能オブジェクトとなる。ただし、本人が消そうと思うと消える。

取得条件

氷結ゴーレムを倒す。

レインはこの短い文章の意味を咀嚼し、理解した瞬間、冷汗がだらだらと流れ、顔が真っ青になった。

「ええ…」

（こんなスキル、なんであるんだ？事実上最強じゃないか。イベントとかで籠城してたらこのスキルマジでチートだぞ？）

これはなるべく使わないようにしよう、と思ったレインだった。運営に目を付けられるのはやっぱり嫌だろう。

…しかし、この時点でもう運営に目をつけられているとは、知るよ

しも無い。

「そうだ、宝箱！良い武器があるといいな〜」

そして、宝箱を開けた途端、

「おおー！」

感動の声をあげた。

何故なら、凄いレア物みたいな輝きを放つ装備が並んでいたからだ。

「えーと、なになに…【氷華の魔剣】、【氷華の羽織り】【氷結のブーツ】…全部【破壊成長】属性持ちか。いいね」

それを一回ストレージに入れ、装備した瞬間、通知音が鳴った。

『スキル：【氷華閃閃】を獲得しました』

「え、また？」

『スキル：【氷華一閃】を獲得しました』

「もう突っ込まないぞ…」

【氷華閃閃】

華を描く、神速の連続攻撃を使用することが出来る。

連撃数は使用者が自由に決められる。

(最小2連撃、最大10連撃)

クールタイムは10分。

取得条件

氷華の魔剣を装備する。

【氷華一閃】

華を描く、神速の単発上段切りを使用することが出来る。

クールタイムは10分。

取得条件

氷華の魔剣を装備する。

「攻撃系スキルか、クールタイムはちよつと長いけどまあいつか。後で試してみよ」

そんなことを言いながら、メイプルに連絡を送り、街への帰路に着いていた。

同時刻く運営

「なっ……なっなな……」

「どうしたんだ？ 疲れてるのか？」

「ひよ、氷結ゴーレムが、が、倒された！」

「……………え？」

一瞬、運営達の空間が、静寂に満ちた。しかし、次の瞬間。

「な、な、なんだと!? 氷結ゴーレムは俺達のストレスと悪意の塊だぞ
!?!」

「だ、誰だ！ 倒した奴は!? ペインか!」

「いえ、レインっていうプレイヤーですね！ やばいですよ！ ふざけて
チートアイテムクリア報酬に入れちゃいましたよ!?!」

「落ち着け！ 第1回イベントを見て、それでやばかったら下方修正す
ればいい!」

その日、運営の人達は慌てまくって、仕事にならなかつたとい
う……………

魔剣使いと友人関係？

突然だが。

俺は今、超驚いていた。

今日も【New World Online】にログインし、先にレベル上げをするために森に入ったメイプルさんを追いかけたのだが。

俺の目の前には、テントウムシのモンスターを貪るように食っているメイプルさんが居るのだった。

「…は？」

彼女に驚かされるのは何回目だろうか。

なんかめっちゃ美味そうに食ってるし…

しかもなんか装備も凄い豪華になってるし。

そして、俺は呆然として見ているまま、

メイプルさんがテントウムシを何匹か食べ終わると…

『スキル：【悪食】を取得しました』

『スキル：【爆弾喰らい^{ボムイーター}】を取得しました』

「悪食…？嬉しい誤算来たー」

そしてメイプルさんはなんか黒い盾に【悪食】を付与し、周りを見渡した。そして、ようやく固まっていた俺に気がついたようだ。

「あ、レイン君！いたんだ！見て見てこの装備！すごいでしょ」

こ、この人…テントウムシを食っていたのを見られていたのに全然気にしてない！いや、気づいてないのか？

「す、凄いね…」

そのマイペースさがな！

…学校にて…

そして翌日。

学校で、本条さん、白峯さん、俺の構図でゲームの話をしていた。

「へえ、イベント」

そう。今日【New World Online】内で、第1回イ

ベントが開催されるのだ。

「うん！プレイヤー同士のバトルロイヤル！」

「上位10名には限定品が貰えるんだってさ」

「やっぱりこういうのは欲しくなっちゃうよね！」

「おおっと？楓さんは予想以上にゲームにハマっているみたいですね」

始めてから毎日居るしな。

「うう…だって、限定って聞くと欲しくなっちゃうんだもん」

「楓も雨宮君も限定に弱いからね」

「俺も!?いやまあ、欲しいけどさ…」

上位の限定品と聞いて、ゲーマーの性が刺激されたらしく、やっぱり早くログインしたそうに目を輝かせている。

「そういえば…さつきから表情が全く変わらずに震えてて怖いんだけど…どうかしたの?」

「ナンデモナイヨキニシナイデ」

「な、ならいいんだけど。なんか片言になつてない?」

…俺が震えている理由。それは、話している二人の容姿のせいだ。

詳しく言うならば、まあ男子の怨念だ。

本条さんと白峯さん。この二人は客観的に見て美女だ。

だからこの二人に好意を持っている男子も多くいる訳なのだ。

つまり…

『なに本条さん、白峯さんと仲良く喋ってんだウラヤマシイ!』

という目で見られ、大多数の男子から殺意を浴びせられていた、という訳である。そして二人はそれに気づくわけもない。

ツライ…!

そして、数時間後。

家に帰ってから3分とせず、【New World Online】にログインし、広場に来ると、隣にメイプルさんがいつの間にかいた。

「うおっ、いつの間にな?」

「ふっふっさつきー!」

…全然分らないが、まあいいや。

空中には巨大スクリーンが浮かんでいた。あれで面白いプレイヤーを中継するのである。それを、生産職の人や参加しなかった人が見ることになる。

「それでは、第一回イベント！バトルロワイヤルを開始します！」

あつちこつちからうおおおといった怒号が響く。

俺は叫ばなかったが、メイプルさんは少し恥ずかしそうにしながら腕を突き上げていた。かわいい。(真顔)

そして、更に大音量でアナウンスが流れる。

「それでは、もう一度改めてルールを説明します！制限時間は三時間。ステージは新たに作られたイベント専用マップです！」

倒したプレイヤーの数と倒された回数、それに被ダメージと与ダメージ。この四つの項目からポイントを算出し、順位を出します！さらに上位十名には記念品が贈られます！頑張ってください！」

そう言い終わると、スクリーンに転移までのカウントダウンが表示された。

「お互い頑張ろう！」

「うん！頑張ろうね！」

最後にステータスを確認する。

レイン

Lv39

HP120

MP12/12

【STR 125 へ+58】

【VIT 50 へ+25】

【AGI 110 へ+65】

【DEX 20】

【INT 0】

装備

頭【空欄】

体【氷華の羽織り：滅殺の誓い】

右手 【氷華の魔剣：状態異常攻撃・氷】

左手 【空欄】

足 【空欄】

靴 【氷結のブーツ：氷結歩行】

装飾品 【空欄】

【空欄】

【空欄】

スキル

【状態異常攻撃Ⅴ】 【パワーアタック】

【スラッシュ】 【疾風切り】 【電光石火】

【氷華一閃】 【氷華閃閃】 【フリーズドブレス】 【永久氷塊】 【疾風一陣】

【太古の一撃】

【筋力強化・中】

【連撃強化・中】 【体術Ⅲ】 【片手剣の心得Ⅴ】

【体捌き】 【気配遮断Ⅲ】 【気配察知Ⅲ】

【しのび足Ⅰ】 【跳躍Ⅲ】

【毒耐性中】 【料理Ⅴ】

「よし、行くぞ」

そして、カウントが0になった瞬間、体が光に包まれ、フィールドへと転移した。

魔剣使いと第1回イベント

「っ……っは？」

レインは眩しくなくなっていることに気付きゆつくりと目を開ける。するとそこは――

「…最悪だ」

なんと草原のど真ん中だった。

「マジでか…これじゃ敵に狙われ放題だな」

まず移動しようと考え、移動しようとした瞬間。

突然、緑色の剣の欠片のような物が飛んできた。

「ッ……」

レインは視界に異物が入った途端、飛んできた方向と逆の方向にバク転し、距離を取り、剣を構える。

そこへ、一人の男が拍手をしながら近づいてきた。

「まさかあの距離から躲すなんてな。お前も人間辞めてるんじゃないか？レインさんよ」

「そりやどうも。褒め言葉として受け取っておくよ。で？お前、なぜ俺を知ってる？あとお前誰？」

向かい合っていた男性は『？』という様子になった。当然だ。

掲示板で結構騒がれているから、知っている人も多い。

もちろんレインは自分が騒がれていることなど知らない。

「お前、掲示板見てないのか？」

「掲示板？なんで？」

「お前、掲示板で結構話題になってるぞ」

「え？マジでか…まあそれは置いといて、お前は？」

「おっと、そうだったな。俺の名前はシンだ」

「…このシンという男もトッププレイヤーだが、レインは知らない。なるほどね…じゃあ自己紹介もしたし、始めるか」

「ああ、そうだな」

顔を引き締め、お互いを見据える。

そして先程から少し吹いていた風が完全に止まった、その瞬間。

「疾風一陣！」

「崩剣ッ！」

同時に動き出す。

(ほうけん……崩壊する剣ってことか！)

レインはスキルによって加速し、距離を詰めるが、レインとシンの距離はおよそ15m。

もちろん有利なのは――

シンだ。

シンの【崩剣】の強みは、攻撃範囲。

相手の武器の間合いに入らせず倒すことが出来る為、とても強力だ。

普通のプレイヤー相手なら、と付くが。

普通のプレイヤーなら、複数の方向から飛来する攻撃を捌ききれず、為すすべもなくやられるだろう。

しかし言わずもがな普通のプレイヤーでは無いレインは、【疾風一陣】スキルによって加速し、【崩剣】を時に剣で弾き、時に回避しながら、シンにどんどん近づいている。

そして。

【氷華一闪】!!」

恐ろしい速さでシンの懐に入り込み、神速の一撃を放った――!

この状況。

シンから見れば、絶望的でしかない。

だが。

運の神はシンの味方をした。

シンが反射的に掲げた小盾が、^{バックラー}奇跡的にレインの斬撃を防いだのだ。盾は砕け散ったが。

まさに奇跡である。

だが、攻撃を防がれた方はたまったものじゃない。

レインは防がれたことに驚きながらも、反撃を受けない為に直ぐに離脱。

こんなことが出来るプレイヤーは中々いない。

普通なら、多少なりとも固まるだろう。

しかし、レインにとって状況は芳しくなかった。

(まずいな…【疾風一陣】のクールタイムは5分。この戦闘ではもう使えない…)

レインにとって加速スキルが無くなることはかなりマズイ。

距離をとって攻撃する戦闘スタイルのシンは、自分から近づく理由がないのだ。だから、レインは自分から近付かなくてはいけない。

しかし、加速スキルがないと、近づくのは困難を極める。

つまり、一発で決められなかったがために追い込まれてしまったのだ。

(くっそ…20m以上離れてるし、ブレスは当たらない。どうする!)

シンの攻撃を回避しながら必死に思考を巡らせる。

(この距離で攻撃を当てる方法…あっ)

レインはいいに1つの方法を思いついた。

逆に言うと、この作戦が失敗した瞬間にレインは負ける。

だがレインは迷わない。

剣を逆手に持つ。

狙いは心臓部。

そして、次の瞬間なんとも綺麗なフォームで剣を――

「う……………おおおッ!!!」

投げた。

「はあっ!?!」

シンもまさか剣を投げるとは思っていなかったのか、避けきれず左肩に剣が刺さった。

「クソ、外したか!」

「まさか剣を投げるとはな…!だがお前はもうこれで武器無し!俺の勝ちだ!」

「…!そいつはどうかかな?」

シンはその言葉に思わず自分に刺さった剣を見ると――
刺さった部分から、体の中心に向かって氷が広がっていた。

「な…!」

「俺の剣のスキルスロットに付与してあるスキルだよ。【状態異常攻撃・氷】。確率で即死だよ。多分確率は一割ぐらいかな。危なかったよ」

この男、こんなに飄々としているが内心は、

(つつぶねええっ!!発動して良かった…!)

という感じである。

そして、シンはそれを聞いて、

「そうか…運が悪かったか。今回は俺の負けだな。また戦える日を…楽しみにしてるぜ!」

そう言い残して、光となって消滅した。

「さて、と…」

そこで一度言葉を切り、溜息をするように、こう言ったのだった。

「やつちまった…」

…そう。さっきの戦闘かなり大きい声を出してしまったのだ。

つまり。

「連戦だよこんちくしよおおおっ!!」

凄い人数の人が手を組んで自分を潰そうと集まって来てるのを見てレインは血を吐くような叫びをあげたのだった…

そして、約2時間30分後。

「はあ…はあ…し、死ぬ…」

恐ろしい程に消耗し、立ってられないほどの疲れがレインを襲っていた。

「なんか…動きが…他の人と、比べ物にならない奴もいたし…」

…その人がランキング上位ののトッププレイヤー、カスミだと言うことは、後で知ることになる。

「終了！結果、一位から三位の順位変動はありませんでした。それではこれから表彰式に移ります！」

レインの目の前が白く染まったかと思うとそこは最初の広場だった。

「順位変動…？必死すぎて順位聞いてなかったな」

そう。極度の集中状態に入っていて聞いていなかったのだ。

ちなみに、レインは極度の集中状態になると無言になり、視野が広くなるが、耳は戦闘に関係の無いことをシャットダウンしてしまう。

「あつ、そういえばメイプルさんはどうなったかな？」

『それでは、上位三名にコメントを貰います！』

どんな人なんだろう。と、呑気に考え、露店で買った奇妙な風味のお茶を飲んでみると…

『では、三位のメイプルさん！一言お願いします！』
お茶吹いた。

レインは五位でした。

魔剣使いと苦手分野

「うっし…行つてきまーす!」

俺は今日も制服を着て、自転車に乗り、学校へと向かう。

ここ数日で日差しも強くなってきて俺の寝不足の目を刺激してくる。

痛い。眩しい。

「あー、眠いなあ…」

そう。俺は昨日、というか今日は寝ていないのだ。

何故なら、完全に忘れていた結構な量の課題を一夜漬けで全て片付けたから。

「はあ…今日は授業中に寝ないように頑張ろつと」

自分に言い聞かせるように言つてから、あまり近くは無い学校に向けて愛用の自転車を走らせた。

そして学校に着くと、自転車を止め、教室に入り自分の席に着いて

速攻で寝る。

そうだ。さつきも言ったが、授業中じゃなければいい。

ホームルームが始まるまでならいいもんね!と心の中で叫び、机に突っ伏する――

「ねえ、雨宮君？」

「……一寸前に声をかけられた。

(ちくしように誰だ俺の安眠を邪魔する人は!?)

直ぐに話を終わらせて寝たいと思ったが、その野望は話しかけて来た人の顔を見た瞬間に音を立てて砕け散った。

「な…何?・白峯さん」

この時、俺が思ったことはたった一つ。

よりもよってあんたかよ。

「話しようよ。New World Onlineの話。楓と一緒に
さ」

「今眠くてさあ…大事なお話だったら聞くよ?」

大事な話じゃないことを願う。頼む!頼む!

「そうそう!大事な話だから聞いてよ!」

ガーン。…まあ、聞くだけならいいでしょ。大事ならしい。本条さんもいるし大丈夫大丈夫!

と思っていた時期が俺にもありました。

この二人…揃うとめっちゃうるせえ…

あとは聞こえたのだが、今日から白峯さんはゲーム開始らしい。

回避盾…をやるって言ってたな。

敵の攻撃を引き付けて回避することで攻撃を無力化するやつ。

どんな戦いでもノーダメージってカッコイイとか二人で騒いでいたのだが。

一つ気になることが。

本条さんは防御力。
白峯さんは回避力。
二人はそれでノーダメージを目指す訳だが…

俺、どうすれば？

俺、回避技術も凄い訳じゃないし防御力に至っては低いんだけど。

あれ？俺もしかしてハブられた？

ちなみにその後、俺は授業中に寝てしまい、みつちり先生に怒られ、白峯さんに笑われた。覚えてろよ…！

放課後。速攻帰ってログインして宿屋に来て。と言われたから、自転車飛ばして家に帰り、ログインして今は宿屋に向かっている。

宿屋の人に要件を説明し、メイプルさん、白峯さん——おっと。キャラネームはサリーっていう名前にしたらしい——が居る部屋のドアを開けると。

「遅いよー。」

「呼び出しておいてそりゃないでしょ…」
枕投げられた。

とりあえずフレンド登録し、メイプルさん、サリーさん、俺でパーティを組むと、俺達二人にステータスを見せてくれた。

サリー

Lv1

HP 32 / 32

MP 25 / 25

【STR 10 ^+11<】

【VIT 0】

【AGI 55 ^+5<】

【DEX 25】

【INT 10】

装備

頭 【空欄】

体 【空欄】

右手 【初心者短剣】

左手 【空欄】

足 【空欄】

靴 【初心者魔法靴】

装飾品 【空欄】

【空欄】

【空欄】

スキル

なし

「色んなステータスに振ってるんだね」

「これが普通だから！」

いや当たり前だから。

普通じゃないみたいになってるけど普通じゃないの君だから。

「それで？今から何処に行くの？」

青いパネルを閉じながらサリーさんが尋ねる。

「えつとね、新しい盾を作る為に素材が必要なんだけど、その素材に南の地底湖にいる魚の鱗がいらいらしいからそれを取りに行きたいなあって」

なるほど地底湖ね。魚か…：そういうえば【釣り】スキルがあつたな。取つてないけど。

「じゃあそこに行こう！」

「人数分の釣竿買って行こうか」

そこまで考えたら後は行動するだけ。

そう思い、部屋から出た。が…

「ちよつ！待って、速いよ〜！」

あ。忘れてた。一人遅い人がいるんだった。

「これでも速かったか…：う〜んそれじゃあ…！」

俺は地底湖方面へと爆走していた。

そして、あの二人はと言うと。

「わ〜！凄い！さすがAGI200越え！」
アジリテイ

「もうちよつと丁寧に運んでくれない？」

「文句垂れないでよ、降ろすよ？二人も担ぐの大変なんだからさあ！」

そう。俺が担いでます。とてつもなく辞めたいです。今すぐ。

「降ろすのは勘弁して欲しいかな！」

どうしてこうなった？

まあ理由は明らかだ。単純に俺が一番AGIが高いからだろう。

「ああもう、掲示板とかに出ないといいなあ…！」

切実な願いである。

そして到着。

「おおおお！すつごい速かった！」

メイプルさんが装備を付け直して嬉しそうに言う。

嬉しそうで何よりだけでももう二度としたくねえ…：…

だって女子ってなんかいい匂いするし！ドキドキする！もう嫌だア！

「次からもよろしくね〜」

えええ…またやんのかよ…

「あーハイハイ分かりましたよーだ」

もう自棄だ！やってやる！

でもサリーさんのAGIが俺より高くなったら絶対辞めるからな
！

そんな茶番もそこそこに、俺達は釣りを始める。二人も自分の釣竿を買ってきたので三人で並んで湖面に糸を垂らして待つ。

そして釣り始めてから一時間。

「や、やっつと三匹目！」

「お、またかかった！」

「よつと…これで十匹か。」

釣果はメイプルさんが三匹。

サリーさんが十二匹。

俺が十匹である。

「ううう、私はまだ3匹なのに二人はもう十匹以上って…」

「DEXがゼロだし仕方ないよメイプルさん」

「私は始めたばかりだから、釣り上げた魚に止めを刺すだけでレベルが上がる上がる〜」

「今レベル何？」

「6」

とても楽しそうに釣りをしているサリーさん。

『スキル：【釣り】を取得しました』

「初スキルが釣りかあ…メイプルのこと変って言えないなあ…」

そんなことを言いながらも一時間釣りを続ける。

メイプルさんの釣果は変わらず。

しかし、スキル【釣り】を手に入れたサリーさんの釣果は二十四匹と
なった。

ちなみに俺もスキル【釣り】を手に入れ、釣果は十八匹。負けた…

「どう？これで足りそう？」

「うーん…もう一時間だけ…いい？」

「いいよー！でも、私も一つ試したいことがあるから…釣りじゃなくて素潜りで狩ってきてもいい？私、現実リアルでも泳ぎ得意だし！」

あー、そういうえば白峯さん水泳成績良かったな…

「AGI足りないからメイプルは無理だけど、レイン君もどう？」

何故か俺を水辺へ押しながら聞いてくるサリーさん。ちょよ待てよ。

「え、遠慮しとくよ。そういう気分じゃないし？」

おいちよつと待て。待ってちよつと待ってほんとに待って下さい
い押さないでお願いします！

「まあまあ、そんなこと言わずに…さっ！」

どーん。

俺は見事に、水に向かって突き飛ばされた。

…俺があんなに心の中で待ってって言いまくった理由。
単純な事だ。

俺、とてつもなく重度のカナツチなんだよ。

つまり。

為す術なく溺れる。

「ボボボボボボボババ」

二人は驚いた様子でこちらを見ている。

え!?!この人泳げないの!?!みたいな目を向けなくてくれないかなほ
んとに。

「オボボバ出来れば早く助けて欲しいんだけどバボボバボバボバ」

川の中の石を拾いに行つて溺れた某ボ○ちゃんの気分だよコノヤ
ローー！

そう。自慢では無いが俺は重度のカナツチである。

学校の通知表の体育の数字が水泳の授業だけで出るならば間違はなく5段階中1だろうと断言出来るほど苦手である。

ここで勘違いしないで欲しいのだが、別に運動が出来ない訳じゃない。

水泳だけが出来ないのだ。本当に。

結局暫くして助けられたが、サリーさんは俺に向かって憐れみの目を向け、すぐに水中へと潜って行った。

…1つ言いたい。

その反応が一番心に刺さる！

いつそ笑ってくれたほうが何倍も楽だよこんちくしょう。

〜約一時間後〜

メイプルさんと微妙な空気になりつつも、釣りは続行。

すると、サリーさんが水から上陸してきた。

「【水泳Ⅰ】と【潜水Ⅰ】のスキルが手に入ってから簡単になったかな！」

そう言っただけでサリーさんはインベントリから真っ白い鱗を数え切れない程出した。

「こ、これ貰っていいの？」

「私はいらないし…今度私の手伝いをしてくれるのと引き換えで」

「じゃあ、それで！手伝うって約束する」

メイプルさんは恐ろしい数の鱗をインベントリにしまい込んだ。そこでサリーさんが神妙な面持ちで話し始める。

「ねえ、メイプル。確か、今見つかったいるダンジョンって三つだけ？」

「えつと…うん、そうだよ」

「地底湖の底に、小さな横穴があった」

「……それって!」

興奮を隠し切れない様子でサリーさんが頷く。

しかし、メイプルさんは水の中を覗き込み、

「私は無理かなあ……」

「あー、レイン君? さっきは……」

「どうかしたの? 大丈夫だよ俺サリーさんに突き飛ばされて溺れかけた挙げ句憐れみの視線を向けられたことに怒ってなんかいないよ?」
(絶対怒ってるううう!)

「冗談だよ。別に怒ってない。気にしてない気にしてない!」
嘘である。

この俺、雨宮菜月ことレインは、突き飛ばされたことはともかく、憐れみを向けられたことには怒っている。ここに二人がいなかったら怒りに任せて攻撃系スキルを壁に向けて放つぐらいには怒っている。

しかし、唇を噛み締めてその衝動を堪えた。

後で思いつきりやればいいからな。

「じ、じゃあ明日から毎日ここに来よう! 借りは即返すってね!」

移動の度に担ぐの俺だけだね。

「そう言ってくれると思ってた! さっすがメイプル!」

「えへへーそれ程でもー!」

まあ、そういうことで、【水泳】スキルと、【潜水】スキルのレベルを上げる日々が始まった。

ちなみに俺はログアウトした後、部屋にあるサンドバッグを木刀で殴りまくり、母さんに怒られた。

なんでや。

魔剣使いと一層ボス

532名前：名無しの大盾使い

皆もう二層には行ったか？俺は無事に二層に入ったぞ

533名前：名無しの槍使い

おう

ついさつき勝って二層入ったところだ

534名前：名無しの大剣使い

俺も無事に勝利

535名前：名無しの魔法使い

俺も

勝ったぜ

やったぜ

536名前：名無しの弓使い

何と俺も二層到達してるんです

537名前：名無しの槍使い

あれ？俺ら割と強くな

538名前：名無しの大剣使い

初心者コンビがさつと二層にいつてもついていけるようにレベル上げてたら：

第一線の仲間入りですよ

539名前：名無しの弓使い

俺もそれだわ

539名前：名無しの大盾使い

そんな二人だが

まだ二層に行っていないっぽい

っていうかパーティー増えた表記が俺のフレンド欄に出てるんだ
けど

540名前：名無しの弓使い

俺それ見たぞ多分

541名前：名無しの魔法使い

ちよつとそれ詳しく

542名前：名無しの弓使い

名前はわからないが初期装備だったし仲よさそうだったからリア友だと思う

543名前：名無しの大剣使い

武器は？

544名前：名無しの弓使い

短剣だったはず

545名前：名無しの魔法使い

意外

魔法使いか弓使いだと予想してた

546名前：名無しの槍使い

俺も

547名前：名無しの大盾使い

まあ盾1枚剣1枚で戦うならその構成は良くないな

だが：あの三人友達だろ

果たして普通の初心者なのか

メイプルちゃんタイプの初心者かもしれない

548名前：名無しの魔法使い

確かにありうる

548名前：名無しの弓使い

メイプルちゃん「極振りは強いよ！」

友達「そうなの!?!じゃあそうする！」

これ

549名前：名無しの大剣使い

極振りの化け物が二人と動きが人間じゃない奴がいるパーティーとか

どうしようもねえぞ

550名前：名無しの槍使い

おいお前ら落ち着け

短剣使いだぞ

550名前：名無しの魔法使い
ああそうか

何か無意識に大盾イメージしてたわ

551名前：名無しの大盾使い

短剣ならAGI特化か？

552名前：名無しの弓使い

でもそれあんまり強くなさそう

553名前：名無しの大剣使い

防御力無いから一撃で終わりだもんな

しかも火力ゼロ

554名前：名無しの槍使い

まあ多分勝手に頭角を現してくるだろ

次のイベントっていつだっけ？

555名前：名無しの大盾使い

今からだいたい一ヶ月後で時間加速させてゲーム内とリアルの間がずれるらしい

んでイベントは二時間で途中参加と退場は時間加速の関係で出来ないんだと

運営が前回の盛況でイベントの開催スパンを短くしたらしい

556名前：名無しの魔法使い

運営ぐう有能

557名前：名無しの槍使い

一ヶ月あれば多分鍛えてくるだろうし

プレイスタイルも見れるだろ

そこで判断出来る

557名前：名無しの弓使い

あー早く次のイベント来いよー

その子の実力気になってしやーない

俺が湖に突き落とされ溺れたあの日から二週間ちよいがたった。

今俺は、本条さん、白峯さんとビデオ通話で今日あった【New World Online】のメンテナンス内容について話していた。

メンテナンス内容は一部スキルの弱体化とフィールドモンスターのAI強化だったようだ。

「ま、俺達に関係あるのは一部スキルの修正だけかなあ」

「でもさあ……………そのスキル修正で……………」

「そう！【悪食】に回数制限が付いちやっただよー！」

まあ当然ではあるだろう。あれは紛れもないチートスキルだし。

《*原作を見ていない人の為の説明！

スキル【悪食】とは、触れた物体（人間も可）をMPに変換して吸収してしまうというチートスキル！

つまり敵にとつてはメイプルさんの盾に触れたら即死の超絶無理ゲーである！》

「しようがないよ。だってあれ強すぎるもん」

「あと……………防御貫通攻撃っていうのが……………」

「まあ……………そりやそうなるよねえ……………」

そう、それだ。一番メイプルさんにとつての壁になるスキル。

ゲームではかなり王道のスキル。

でも相手にするところまで怖いとは……………

完全に運営の苦肉のメイプルさん対策だな。

イベントが終わってから掲示板を見てみたら頭でモーニングスター弾き返してた映像見ちゃったし。その気持ちはとても分かる。

あの映像を見た時は流石に固まった。

だって頭だよ？頭に当たったのに笑ってたよ？

ぶっちゃけちよつと怖かったわ！

そりや貫通攻撃実装も当然と言えば当然だ。

そしてもうひとつの修正。

モンスターのAI強化だ。

これは第二のメイプルさんのような存在を作らないための対策だろう。

例えばメイプルさんのスキル【絶対防御】。

こういう何分間ナントカする、という取得条件のスキルを簡単に取らせないためだ。

AI強化がされたから、もう一時間ずっと攻撃なんてして来ない。だから実質【絶対防御】はこれから取得するのは不可能だ。

……まあ、俺の【疾風一陣】もそうなんだけどね。

「あつ、そうだ。明日は二層に行く?」

話を变えたのは白峯さん。

「そうだね。もう第二回イベントの告知も来てるし」

「そつかくそうだね!じゃあ明日は頑張ろー!」

そう本条さんが言い、電話を切る。

「さて……と」

俺ももう眠い。思わず欠伸をした。だが俺にはまだやることがある。

それはもちろんー

課題だよ。

終わって無いんだよてか多いんだよ!

〳翌日〳

学校が終わり、俺達は町の中央の噴水で待ち合わせていた。

「二人とも遅いな」

もう集合時間から10分経っているんだけど。

そしてまた2分後くらい。

「お待ちせ〜！」

お、ようやく来…た？

「おろ？それユニークシリーズじゃん。手に入ったんだね」

そこには青を基調とした装備を付けているサリーさんの姿があった。

「うん。レイン君が用事あった日に終わらせちゃった」

いや別にいいんだけど。俺泳げないし。

「よし！全員揃ったし、二階層に向かおう！…あつ…どうする？多分あそこもユニークシリーズがあると思うけど…」

二階層に上がるための条件が『ダンジョン』の突破。多分一人で突破で装備が手に入るだろう。

「うーん…私は別にいいかなあ…今の装備気に入ったし」

「俺もいいよ。あんまりユニーク装備取りすぎると一部のプレイヤーから批判来そうだし」

ただでさえパーティ全員ユニーク装備なのにこれ以上取ってもね。

「じゃあ三人で行こっか！私も普通の大神手に入れたし！」

そういえばイズさんに作って貰ったらしいな。

後で見せてもらお。

そして俺達三人は二階層へと続くダンジョンへと向かった。

移動方法？決まってるじゃん。

「やっぱりはやーい！」

「ねえーやっぱりもうちよつと丁寧にく〜！」

「ほんとに置いてくよ!?!文句言わないで！」

結局また俺が担ぎました。

数分後。

「到着！」

「よーし、早速中に入ろう！」

「生き生きしてるね2人とも…」

目の前には石造りの遺跡の入口がある。
情報通りならここが二階層に繋がるダンジョンだ。

メイプルさんを先頭にして道を歩く。闇夜ノ写を構えながら歩いているだけで防御面は万全だ。

そうして歩いている内にモンスターにも遭遇する。

前から現れたのは少し大きめの猪だった。

「ウインドカッター！」

サリーさんが先手をとって魔法を撃ち込む。しかしそれはHPバーを二割程削っただけだった。

「むう…結構威力減ってるなあ。これは私も状態異常攻撃スキルを上げないとなあ」

そんなことを言っていると、体勢を立て直した猪が突進してきた。それは勢いよくメイプルさんにぶつかろうとして。

大盾に呑まれた。

猪は自殺しに行ったようにしか俺には見えなかったが。

だってメイプルさんの盾に突っ込むプレイヤーなんてもういないし。

…これが俗に言うダイナミック自殺か。

「んー…猪との戦闘は二人に任せていい？」

「おっけー！」

「おっけ。試したいことあったし」

「試したいこと？」

「うん。俺のスキルの…」「二人とも猪4匹来てるよ！」

お。丁度いいや試そ。

剣を右肩に担いで構え、その刃にペールブルーの輝きを宿す。

そして、

「【氷華閃閃】！」

突進しつつ一体目の猪を右からの上段斬りで仕留める。

そして回転しながら横一文字に切り払い、2匹目撃破。

さらに左下から斬り上げ、3匹目撃破。

そして最後に大上段から剣を振り下ろし、一刀両断。

戦闘終了だ。

「おおー！鮮やかだね！」

「今のはどんなスキルなの？」

驚く二人。まあ自分で言うのもなんだけど凄いいからな。

「【氷華閃閃】っていうスキルで、連撃数を指定出来るんだ！」

「へえ〜凄いね！」

そうだろうそうだろう。ハツハツハ！

その後、サリーさんの【蜃気楼】スキルの実験などをしながら進んでいると、明らかにボス部屋臭がする部屋に着いた。

その大扉を開けて中に入る。

天井の高い広い部屋で奥行きがあり、一番奥には大樹がそびえ立っている。

俺達が部屋に入って少しすると背後で扉が閉まる音がする。

そして。

大樹がメキメキと音を立てて変形し、巨大な鹿になってゆく。

うわあー怖っ（棒）

そして樹木が変形して出来た角には青々とした木の葉が茂り、赤く煌めく林檎が実っている。

樹木で出来た体を一度震わせると大地を踏みしめ俺達を睨みつける。

「来るよ！」

「おっけー！」

「了解！」

鹿の足元に緑色の魔法陣が現れ輝き出す。

戦闘開始だ。

鹿が地面を踏み鳴らすと魔法陣が輝き、巨大な蔓が次々に地面を突き破り現れ、俺達に襲いかかる。

「よっ!と…」

「ははっ!遅いね!」

「はあっ!」

メイプルさんの大盾は正面からその蔓を受け止めて飲み込む。サリーさんは自慢の回避力で、唸りを上げて襲いかかる蔓を難なく躲す。

俺は蔓が来る方向を読み、回り込んで断ち切る。

メインアタッカーはメイプルさん。毒竜ヒドラでじゃんじゃん攻撃してもらおう。

【毒竜!】

メイプルさんの渾身の攻撃は蔓を飲み込み溶かし消し飛ばして鹿へと迫る。

しかし、毒竜は鹿の目の前で緑に輝く障壁に阻まれて消失した。

「えっ!?」

「多分、あの魔法陣!攻撃が通ってない!」

鹿は再度蔓を伸ばして攻撃してくる。それ自体は俺達にとって全く問題で無いのが救いだ。

「ちよっと観察に回るから、防御を受け持ってくれる?」

「分かった!…【挑発】!」

蔓の向かう先が明らかにメイプルさんに偏る。

「よし、今なら…!」

そうしてサリーが観察に回ってたったの数秒。何かに気付いたようだ。

「角の部分には攻撃が通るよ!…あと、障壁はあの林檎が維持してるっばい!」

サリーが木の葉の中で煌めく林檎を指差す。障壁発動時には林檎がより赤く輝いていた。

「じゃあ…私に任せて!纏めて吹き飛ばすから!」

「頼むよ!」

【毒竜！】

メイプルが新月を突き出す。再び現れた毒竜は今回は障壁に阻まれることなく木の葉全てを飲み込み溶かした。

【ウインドカッター！】

今度は障壁に阻まれることなく鹿に攻撃が通った。赤いダメージエフェクトが散る。

「よしっ！通った！」

「よーし！大技でいっくよー！」

大盾に浮かんでいた結晶がパリンパリンと音を立てて割れると共に新月から巨大な紫の魔法陣が展開される。それはしばらくして光を増し、三つ首の毒竜となつて鹿に襲いかかった。

鹿の体が溶けて赤いエフェクトが絶え間なく溢れる。間違いなく致命的ダメージだった。

しかし、鹿の足元の緑の魔法陣が一際輝きその傷を癒す。HPバーを二割まで回復すると毒の状態異常を取り除いて魔法陣はその役目を終え、薄れて消えていった。

「さっきのつてまだ打てる!？」

「いけるけど、ちよつと時間かかる！」

「いや！もういいよ！」

そこで二人に声を掛けたのはレイン。なんと鹿のうなじの所に立っていた。

「ええ!?!どうやってそこまで!？」

「普通に跳んだ！その後は角掴んで体の揺れが無くなるまで待ってた！」

…その時メイプルとサリーはやはりこの人は規格外だ、と思ったそうだ。

「とりあえずこれで終わりだ…！」

レインは突き技の要領で鹿のうなじに剣を突き刺した。

鹿が悲鳴にも似た声を上げるが、まだ終わらない。

「1回やってみたかった刺してから発動する奴…！食らえッ！」

【フリーズドブレス！】

レインが剣から出した青い光の矢は鹿の首から上を消し飛ばし、鹿はそのままポリゴンとなって消滅した。

「……………??」

その時二人はまさに目が点になったと言う。

魔剣使いと第2回イベント①

メイプル、サリー、レインは第二層の町にいた。

今日は第二回イベントの日ということで、気合いもバッチリ、準備も出来る限りやりきつてある。

ここで、運営からのアナウンスが入った。

「今回のイベントは探索型です！目玉は転移先のフィールドに散らばる三百枚の銀のメダルです！これを十枚集めることで金のメダルに、金のメダルはイベント終了後スキルや装備品に交換出来ます！」

そうアナウンスが流れステータス画面が勝手に開き表示されたのは、金と銀のメダルである。

そのうち金のメダルにメイプルとレインには見覚えがある物。

金のメダルは二人が前回イベントの記念品で手に入れたあのメダルだった。

「前回イベント十位以内の方は金のメダルを既に一枚所持しています！倒して奪い取るもよし、我関せずと探索に励むもよしです！」

幾つかの豪華な指輪や腕輪などの装飾品、大剣や弓などの武器などの画像が次々に表示されていく、全てこれから行くフィールドの何処かに眠っているのだ。

勿論大盾も、片手剣もあった。

「死亡しても落とすのはメダルだけです！装備品は落とさないの安心して下さい！メダルを落とすのはプレイヤーに倒された時のみです。安心して探索に励んで下さい！死亡後はそれぞれの転移時初期地点にリスポーンします！」

取り敢えずは一安心だ。

装備品を奪われないのならばある程度は気楽に出来ることだろう。

探索も全力を出せる。

「今回の期間はゲーム内期間で一週間、ゲーム外での時間経過は時間を加速させているためたった二時間です！フィールド内にはモンスターの来ないポイントが幾つもありますのでそれを活用して下さい！」

つまり、ゲーム内で寝泊まりして一週間過ごしても現実では二時間しか経っていないと言う訳だ。

「なんていうか不思議な感じだね」

「終わったあと時間感覚狂いそうだな…心配だ…」

「一度ログアウトするとイベント再参加が出来なくなるって、だから最後まで参加するにはログアウトは出来ないね。後は…パーティーメンバーは同じ場所に転移するってさ」

メイプル、サリー、レインは説明を耳で聞き、ステータス画面に流れてくるのを目で見て、相談した結果ログアウトはしない方向に決めた。

「三人分のメダル、取れるといいね」

「うん、頑張ろう！」

「そうだね……………」

あ、ステータス確認しとこ」

レイン

Lv42

HP120

MP12／12

【STR 135 へ+58】

【VIT 50 へ+25】

【AGI 120 へ+65】

【DEX 20】

【INT 0】

装備

頭 【空欄】

体 【氷華の羽織り：滅殺の誓い】

右手 【氷華の魔剣：状態異常攻撃・氷】

左手 【空欄】

足 【空欄】

靴 【氷結のブーツ：氷結歩行】

装飾品 【空欄】

【空欄】

【空欄】

スキル

【状態異常攻撃Ⅴ】【パワーアタック】

【スラッシュ】【疾風切り】【電光石火】

【氷華一閃】【氷華閃閃】【フリーズドブレス】【永久氷塊】【疾風一陣】

【太古の一撃】

【破壊王】【筋力強化・中】

【連撃強化・中】【体術Ⅲ】【片手剣の心得Ⅵ】

【体捌き】【気配遮断Ⅲ】【気配察知Ⅲ】

【しのび足Ⅰ】【跳躍Ⅲ】

【毒耐性・大】【料理Ⅴ】

そして、カウントが0になった瞬間、三人の体は光となり、第二層の町から消えていった。

そして三人が転移して草原に来てから1時間が過ぎた。
が……………

「あんなに気合いを入れはしたものの…」

「行けども行けども草ばかり」

「探索系イベントだし仕方ないでしょー」

成果、未だ無し！

何も無い。強いて言うならば景色が綺麗である。

だがそれは今は関係ない。三人も少し焦り始めた！

「ヒントとか無いのかなあ…」

「そうだねー、迷宮の隠し財宝だったりボスキャラがドロップっていうのが定番だけど…二人はどう思う？」

「うーん、俺はやっぱり宝は洞窟とかにあるイメージがあるかな…メイプルさんは？」

「そう言い、メイプルのいる方を見るとー」

「……」

居ない。

いつの間にか忽然と姿を消していた。

「め、メイプル!?どこ!」

「い、いつの間に!」

周りを見渡すが、メイプルの姿は無い。

「下!下だよー!」

「え?下?」

何故か地面の下の方からメイプルの声が響いた。

それを聞き、さつきまでメイプルが歩いていた場所を触ってみると

...

「何コレ...トラップ?」

透けた。

サリーの使うスキル『蜃気楼』のようなスキルで隠して落とし穴を隠していたのだ。

「あつ、サリー!レインくーん!」

トラップによって落ちたにも関わらず呑気に手を振るメイプル。

「大丈夫ー?ダメージは?」

「あー、全然平気!ノーダメージ!」

「ああ、うん...心配した俺が馬鹿だった」

「そりやそうだよね」

二人は、愚問だった...と考えるのであった。

「それで...この洞窟、奥に繋がってるみたいだけど」

「え、ホント?じゃあそっち降りるねー」

サリーはジャンプし、穴に飛び込んだ。

「うわあ...片足だけ踏み外したらすっごい怖そう」

恐ろしいことを考えながら、レインも飛び込み、見事に着地。

「結構怖いなコレ...つてか、いきなり落ちたのに声もあげなかったメイプルさんは図太いというかなんというか...」

レインがぼやく。

「びっくりして声が出なかったただけだよ」

(ほんとかな...)

レインは正直なところホントなのか怪しがっていたが、今考えても仕方ない、と切り替え、洞窟の奥に繋がる道を見た。

「隠しダンジョンかなあ？」

「行ってみる？」

「いや行かないと多分地上に戻れないと思うよ」

「あはは、そっかあ…」

「出られる出られないを抜きにしてもこれは行くしかないでしょー！」

先頭を歩くノリノリのサリーに続いてレインとメイプルも洞窟の奥に踏み込んで行った。

数分後。

途中ゴブリンとエンカウントしたものの難なく撃破し、三人はいかにも『この先はボス部屋だよ』という雰囲気醸し出している厳つい扉の前にいた。

「ボス部屋…かな？」

「どう見てもそうでしょ」

この扉を開けてすっごい弱そうなモンスターが出てきたらそれはそれは笑えるだろう。

「準備はいい？開けるよ？」

「うん、おっけー！」

「了解。奇襲に気を付けて」

サリーが五メートル程の木製の扉を開き中へと入る。

中は広く、薄暗い。

天井までは十メートル近く、周りを見るに横幅も同じくらいだ。

「何も居ない…？」

「いや、絶対何か居るはず！」

「……………」

喋る2人とは対象的にレインは黙って暗闇の中にいるであろう敵の気配を探る。

そして約二秒たったその瞬間。

獲物を狙う視線を” 感じた ”。

「上だー！」

敵が狙いをつけ襲いかかってくるまでのその刹那。

彼の体は即座に剣を抜き、雷光の如き速さでサリーの前に出る。

「!?」

敵が攻撃に転じたことで敵が何なのかようやく見えた。

天井に張り付いて獲物を見ていた敵の正体は、ゴブリンだった。

ただし普通のゴブリンとはサイズが比べ物にならない。

およそ3倍近くはあった。

そしてゴブリンは天井から落下の勢いに任せて巨大なサーベルを振り下ろして来た。

「…………… セアアッ！」

雄叫びを上げ、剣を振りかざす。

ガアン!という金属同士がぶつかり合う音が洞窟に響く。

レインの振った剣はゴブリンの攻撃の勢いを止めていた。鏢迫り合いの状態だ。

「ナイス！」

「俺が隙作るからサリーさんは交代で攻撃よろしく!メイプルさんは俺達がタゲ取ってる間にゴブリンの死角に移動して次の指示まで待機!」

レインは一瞬で、単純ではあるが策を立て直ぐに指示を出した。

「了解!」

戦闘開始だ。

ゴブリンとの鏢迫り合いの状態から、ゴブリンはサーベルを押し込んでくる。

残念ながら俺は、スキルを発動していない状態ではコイツに力勝負では叶わない。

ーならば。

受けきれないのなら受け流せばいい。

剣を横にずらし、力を流す。

すると、ゴブリンの得物は俺の横を通り過ぎ、地面を抉った。

すげえパワーだな…

それを見たゴブリンはイラついたような声を出した。

そして、力任せに斬りかかってくる。

その当たったらかなりダメージを喰らいそうな一撃を俺はー

【氷華一閃】ッ！

重単発上段斬りのスキルで弾き返した。

弾き返した瞬間、ゴブリンの態勢が大きく崩れる。今だ！

「サリーさん！」

「ちよつとぐらいは活躍しないとね！【超加速】！」

サリーさんの体がぶれて、加速。

俺がバックステップで後ろに下がると同時にサリーさんがゴブリンの懐に入り込み、

【ダブルスラッシュ】！【ウィンドカッター】！【パワーアタック】！

【ダブルスラッシュ】！

【超加速】の効果も相まった高速の連撃が叩き込まれる。

タゲはまだ完全にサリーさんには向いてない…よし！

俺の役目は終わった。メイプルさんに指示だ！

「メイプルさん！俺が合図するからそのタイミングで毒竜を！」

「分かった！」

タゲが完全にサリーさんに向く瞬間を見極める！

合図を出すのはサリーさんにゴブリンが攻撃する直前…！

【パワーアタック】！

サリーさんが渾身の一撃を叩き込み、ゴブリンがサリーさんを睨みつける。そしてサーベルを振りかぶってー

「今だ！メイプルさん！」

「おっけー！毒竜！」

メイプルさんの声が三つ首の毒竜を呼び出す。

サリーさんに意識を向けすぎてより大きな脅威を放置してしまったゴブリンはその背に毒竜の攻撃を受けることになってしまった。アホめ。全部作戦通りだ。

毒竜での大ダメージに加えて、最高レベルの毒ダメージ。それでも、何とか立っていたのはゴブリンのボスとしての意地だったのかもしれない。

しかしそれも長くは続かず、その巨軀を輝く光に変えて爆散した。

「お疲れ〜！」

「お疲れ様、ナイス二人とも」

「なんかレイン君指示凄かったね〜」

それぞれ好きにコメントしてから、ハイタッチをした。イエーイ。

「じゃあとりあえず宝箱開けよっか」

「そうしようか」

そう言うと二人はゴブリンが座っていた玉座の元へ向かう。

そこには装飾は無いもの大きめの宝箱があった。

「開けるよ〜」

「おっけー！開けちゃってー！」

サリーさんが宝箱を開ける。

中に入っていたのはゴブリンが持っていたのと同じ見た目のサールベル。

そして、銀色に輝くメダルが三枚だ。

「やった！メダルだ！」

「しかも三枚、三枚だよ！」

二人はサールベルなどそっちのけでメダルに夢中になるが、俺はいかにも攻撃力が高そうなサールベルが気になった。そもそも、サールベルは二人とも装備出来ないのだから興味がなくて当然か。

「ダンジョンごとにメダル三つなら…100個もダンジョンがある…？」

「難易度で変わるのかも？もつと強いボスもいるとか！後は…隠されているだけでボスはいないとか…」

「ギミックで手に入る、みたいのものもあるかもね」

「ああそっか、そういうのもあるか」

サリーさんは一旦考えるのをやめたらしくサーベルを手にとってその性能を見る。

【ゴブリンキングサーベル】

【STR+75】

【損傷加速】

「うおお…なかなかの脳筋武器だあ…」

「どういう感じ？」

「壊れやすくて長時間戦闘は出来ないけど、STR+75」

「私達は装備出来ないよね？」

「うん」

「装備ははずれだったかあ…」

「いや俺使えるんだが…」

「俺は使えるから、それ貰ってもいい？」

それを聞いたサリーさんは目を丸くした。

「え、これ両手用武器だよ？使えるの？」

さっきのゴブリンは片手で使っていたが、ドロップアイテムとしては両手剣の部類になるらしい。

だが問題無い。メイプルさんに感謝だな。

「俺、メイプルさんに勧められて『毒竜の迷宮』に最近行ったんだけど、その時『破壊王』ってスキルを獲得してね。そのスキルの内容が『両手武器を片手で使用できる』っていうのだったからさ、使える使える！」

「あー、あの時ね！確かに勧めたよ！」

「へえ…………… そうなんだ」

そう言つて、俺はサーベルを左手で掴んだ。

「ちよつと振つてみたいから離れてくれる？」

「うん、分かった！」

俺はサーベルを持った左手を後ろに下げ、水平切りの姿勢をとる。

「…………… セアアッ！」

俺が振ったサーベルは物凄い風圧を起こし、サリーさんとメイプルさんの前髪を少し乱した。

「…おおう…」

「すっごーいー！」

俺はドロップした剣をストレージにしまい、ゴブリンが倒れた場所に出現した魔法陣を見た。

「…さて、そろそろ行くこうか」

「次のダンジョン探しに行く？あの魔法陣に乗れば外に出れると思う」

「…あと一つくらいなら今日中に行けそうかな？スキルも持つと思う！」

二人は相談を終えると魔法陣に乗った。

メイプルさんの【悪食】のことを考えると一日の内には出来るだけ探索して使い切りたいところだ。

明日に持ち越しは出来ないから、攻略出来る数が減るもんね。

俺も遅れないように急いで魔法陣に乗った。

視界が光に包まれ、転移の時特有の浮遊感を味わいながら目を瞑った。

そしてふと目を開けるとそこは元の草原だった。

「忘れてた…取り敢えず、草原を出るところから始めないと…」

「ど、どっちに行くのがいいかな？」

「闇雲に突き進むよりは見えてる山に行った方がいいと思うよ」

俺達の視線の先には、少し遠くに高くそびえ立つ山があった。

「それもそうだね！」

そして俺達は山岳地帯を目指して歩き出した。

はあああああ!?!ふざっけんなよ○ね!

あれから俺達は草原を抜け、森から出ていた。

「よっし! 抜けた!」

「疲れたああああ…」

「うーん! 久しぶりに明るいから眩しいや…」

メイプルさんが装備を戻して伸びをする。

目の前にはほとんど草の生えていない荒地が広がっている。そしてそれは山岳地帯にまで続いていた。

「この環境の変わり方はゲームじゃないとありえないよねー」

「まあ、こんな現実世界であつたら色々とおかしいからね」

「次にどんな景色が待ってるか分からないのはワクワクするよね!」

俺達は荒野を進みつつ会話する。モンスターが近づいてきてもすぐに分かる地形のため、索敵は容易い。

だから、遠くに歩いている三人のプレイヤーらしき人影を見つけることが出来た。

「メイプル。誰かいる」

「プレイヤー三人。装備はそれぞれ大剣、短剣、片手剣だと思う」

「装備はどうする? 【悪食】は取っておいた方がいい?」

「【悪食】は使えた方がいいかも、即戦闘になるようなら…【カバームーブ】で突っ込んでいけた方がいい…あとは…」

「もし一緒に登ることになったら…」

まあ、余計な心配かもしれないけど警戒しておくに越したことは無いだろう。

俺とサリーさんがメイプルさんに小声でもう一つの作戦を伝える。

「了解」

俺は索敵スキルを使い、警戒心を強めつつ進む。メイプルさんは前回イベントで三位になっているため大抵のプレイヤーはその顔を知っているだろう。

そしてこの言い方は自分語りしてるみたいでなんか嫌だけど、俺もイベント五位だったので顔は知られている…と思う。

人によつては、メダルを奪うために襲ってくる可能性もある。

そうして進むうちに向こうも俺達に気付いたようで立ち止まって相談し始めた。

すると武器を構えることなく、三人は俺達に向かって歩いてきた。

そして声がギリギリ届く所まで来ると

「いやー初めて人に会えたと思えば…まさか前回ランカー二人とは…」

「本当びびったわ…俺らに戦闘の意思は無いんで出来れば見逃して欲しい…!」

「俺達は今から登山だからなあ…無駄にスキルは使いたくないんだ」

「なるほどー。私達も今から登山なんですよね。きっとあの山には何かあると思うんですよ…」

メイプルさんの発言に三人も同意見のようで、同行させて貰えないかと申し出てきた。

「どうする二人とも?」

「……………いいんじゃない?」

「ま、別にいいけど」

こうして、6人で山を目指すこととなった。

「じゃあ、私とレイン君が先頭行くから…メイプルは三人の前に立つて守る感じで」

「おっけー!どんなモンスター相手でも守って見せるよ!」

メイプルさんがぐつと大盾を構えてみせる。これ以上頼もしい大盾使いがいるだろうか…いやいやない。いてたまるか、これ以上硬い奴なんて!

「頼もしいな」

「本当にな」

後ろの三人も同意見みたいだな。まあ、そりやそうだよな。

登っていく途中何度かモンスターと遭遇したが、メイプルさんが守るまでも無く撃破。

そして、目的地が近づいてきた。

「よっし、もうひと頑張り！」
メイプルさんが大きく伸びをした、
その時。

「行くぞー！【鎧砕き】！」

「【デیفエンスブレイク】！」

「【スループレイド】！」

メイプルさんの後ろにいた三人が一斉に斬りかかって来た。
防御力貫通スキルがメイプルさんに迫る。

ずつとメイプルさんの隙を窺っていたかのようにその連携はスムーズだった。

これ以上ない奇襲と言えるだろう。
だが。

「【カバームーブ】！」

その凶刃はメイプルさんには絶対に届かない。

俺の伝えたもう一つの作戦は三人が同行することになった時にわざと隙を見せて、三人の同行の真意を晒させるといふものだった。

俺とサリーさんはもし三人が同行を申し出てきた場合は一攫千金を狙って攻撃してくる可能性が高いと踏んでいたのだ。

「「なっ…なにイローツ!!」」

男達が奇襲が不発に終わったことに驚愕し、動きを止める。

よほど自信があつたのだろう。

…それにしても、『ジョ○ヨの奇○な冒険』みたいな驚き方だな。
実際に聞くとうつとうしいなコレ。

「【氷華一閃】！」

「【ウインドカッター】！」

「ぐあああッ！」

サリーさんとの連携攻撃で短剣使いを仕留める。あと2人。

片手剣使いは失敗したショックからまだ立ち直れず呆然としてい

る。チャンス！

【太古の一撃】！
エンシエント・ストライク

助走で勢いを付け、片手剣野郎に向かって剣を突き出す。

「がはあああッ……！」

俺の攻撃は敵の心臓の位置にドンピシャ。

一撃で倒すことに成功。やったぜ。

そして技の硬直が終わった瞬間に、残りの大剣使いを見る。と…

何故かニヤつきながらウインドウを操作していた。

あつ、やべえ。なんか嫌な予感がする。

「ちよつと、何してるの？」

サリーさんも気になった様で少し威圧気味に尋ねる。

すると返ってきた答えは…

「あ？決まってるんだろ。『山岳エリアに前回5位のレインが居る』って
拡散してんだよ！」

……………オイ。

「テメー何してくれてんだ！なんで俺だけなんだよ！ふざっけんなよ
ぶっ殺すぞ?!いや絶対ぶっ殺す！ファッ◯ユー！」

「レ、レイン君？なんか性格変わってるよ？」

「ああ!?やってみろやボケ！」

「何だ?!?実力の差見せてやr 「毒竜」……」
ヒドラ

「がはあッ!？」

…いきなり割り込み攻撃してきたメイプルさんによって俺がブチ
殺そうとしていた大剣使いのクソ野郎が殺られた。

「メ、メイプル…」

「……………」

「え、私何かしちやった？」

「…いや、うん。まあ…ちよつとは空気読もうか」

(レイン君の表情が怒りを超えて無になった…)

「…ハツ、こんな事してる場合じゃない！」

(あ、元に戻った)

そうだ、あのクソ野郎に人を呼ばれたんだ…野郎が拡散した情報は恐らく俺だけ。なぜならメイプルさん相手に勝機があると思うのがまずおかしい。そしてサリーさんは情報無しの謎の人だから無い。

そして俺。俺は前回のイベントで結構注目されちまったし、情報も出てる。対俺だけなら勝機があると思う奴は多いだろう。

「クツソ、もう二人で山頂行つて！多分狙われてんの俺だ！」

「わ、分かった！後でちゃんと合流しようね！」

「気を付けて！」

そう叫び、サリーさんとメイプルさんは山頂に向かって走り出した。

さて。

敵はどれくらいいるかな…

……………はへえ？

いや多すぎでしょ！

軽く100超えてるけど!?

どんだけ俺に恨みあるんだよ!?

「居たぞー！」

「殺してやらあー！」

「前回のイベントの屈辱、晴らさせてもらうー！」

いや俺ほんと前回何したんだよ！

そして、俺はは左手にサーベル、右にはいつもの片手剣を持ち、

「クソツタレええええええええええツ！」

血を吐くような叫びを上げ、大群へと突っ込んだ！

俺がお前らに何をしたって言うんだ！

やあみんな！雨宮菜月こと、レインだよ！

さて、本当に突然だけど俺は今――

「ぎいやあ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ
ああ！！！」

死にかけの状態で逃走中です♪（現実逃避）

「こらー！ー！待ちなさい！逃げるなー！ー！【多重炎弾】！」

「いやだあああああああああああああああ！」

後ろには、魔法を撃ちながら追ってくる「マルチキャスト多重詠唱」というスキルを使うことで有名なフレデリカ…と。

「待て！噂に聞くメイプルはこの程度で逃げたりしないだろう！【炎帝】！」

「メイプルさんと比べんじゃねえええええええええええ！アホがあああああああああつ！」

「【ミイ様にアホとか言うな！待てクソガキ！】」

「うるせえバーーーーーカ！この状況で待てと言われて待つ奴がいるかアー！」

「【炎帝】こと【炎帝の国】リーダー、ミイ。

そしてミイの取り巻き。数はおよそ……………

50人くらい♪（現実逃避中）

……………みんな、こう思っただろう。

どうしてこんなカオスなことに？
と。

それはほんの少し前…探索を放棄して俺を殺しに来たヤツらを一通り片付けた頃だった……

「はあっ…はあっ…はあ……………はああああ……」

浅くなった呼吸を深呼吸して無理矢理整える。

そして、不敵な笑みを浮かべている、恐らく…いや、確実に俺を殺りに来た敵の中で一番強い敵に向けて、俺も不敵な笑みを浮かべる。

「準備は出来たのかよ？」

「ああ…行くぞドラグ！」

「おう、来いや！」

その言葉が合図だった様に、俺と相手は同時に動き出す。

俺が今対峙しているのは前回イベント6位のドラグ。

俺が自分以外の襲撃者を全滅させるのを待っていたらしい。

理由は、一対一で俺と戦ってみたかったからだそうだ。
ドラグが斧を振りかぶる。

そして斧がオレンジ色の光を放つ。

【パワーアックス】！」

：ドラグの攻撃は重いだろう、恐らくこれ以上無い程に。

一手じゃ叶わない：なら、【氷華閃閃】の最大連撃数、十連撃で勝負だ！

右手の剣が水色に輝く。

【氷華閃閃】！！？」

そして剣を肩に担ぐように構え、右上段から最速の斬撃を放つ！

「おおおおおおおおおおおおおツツ！！？！！？」

お互いに雄叫びを上げ、振りかざした剣と斧が衝突する――！

【多重石弾】！！？」

え。

声のした方を恐る恐るチラリと見る：すると。

石弾が3発、俺に迫って来ていた。

「え、ちよ嘘だろ待ってちよつと待てゴハア！」

石弾は俺の腹、肩、膝にそれぞれクリーンヒットし、俺は横に10m程ブツ飛ばされ、転倒する。

元々7割程残っていたHPバーは3割程までガクツと減少した。

「な…んだ…？」

「ドラグー！だいじょーぶー？」

「フレデリカ：一対一だったんだから邪魔すんなよ…」

空気を読まずに魔法をぶっ放してきたのは、スキル【多重詠唱】の使い手、フレデリカだった。

空気読めよ馬鹿が…メイプルさんといい勝負だぞ？空気読まない事に関しては…

「ま、取り敢えずトドメ刺さなきゃね〜」

「…悪いな、レイン。いつか本当に一対一やろうぜ…」

…：相手はトッププレイヤー2人。俺のHPもかなり減っているし、何より今俺は転倒している。これは…無理だな、どう考えても。

どこか他人事の様を考える俺にフレデリカが近づき、確実にトドメを刺すために近距離で魔法を使う――

「炎d…」

「【炎帝】！」

え。

その瞬間、上空から火球が多数飛んで来た。

…：またこんなにかよもおおおおおおお！！？！！？

倒れた状態のまま転がって何とか回避するが、1発胸に命中。

「がっ……………」

体力がさらに2割以上減り、体力が1割以下になる。

今度は『炎帝ノ国』かよ！

ふざけんな！俺がお前らに何をしたって言うんだアアアアア！！

？！！？

しかもリーダーのミイじやねえか！取り巻きもめっちゃいるし！

死ねやああああああああああああああああああああ！

「ミイ様！どう致しますか？」

「ふむ…まずはレインの前にあの二人を倒すぞ！」

「了解しました！！？！！？」

……なんてこった。

——チャンスが出来た。

生き残れる確率は低いけど……やるしか無い！

炎帝の国のメンバーの意識が俺を外れ、ドラグ、フレデリカに向く。

瞬間、俺は立ち上がり……

超速で回れ右をして逃げ出した。

「……ッ！ミイ様！レインの野郎が逃げやがりました！」

「……逃すな、追うぞ！」

「…ドラグ、追うよ！」

「おう！」

気付くのはや！ヤバイかもな…！

「【炎帝】！…貴様、そんな一目散に逃げるとは…プライドは無いのか!?」

…何言ってるんだアイツは…？

「はあ？プライド!?何それ美味しいのか!？」

「プライドは食べるものじゃない！」

「ツツコむ所そこオ!？」

フレデリカが見事なツツコミを入れた所で、地獄の鬼ごっこが始まった…！

…というわけだ。

そして今は…

「ぎゃああああああああああああああああああああああああああ!!?!!?」

「待てーーーーー!!?!!?」

「ニコローーーーーす!!?!!?」

クソ、このままじゃいずれ追いつかれる!

もう勿体ぶっている場合じゃない!

使うしか…!

俺はストレージからあるアイテムを取り出し、地面に叩きつけた!

瞬間、そこから煙がモクモクと溢れ出てくる。

「な…なんだ?!」

「見えない…!」

俺が今使ったアイテムは、あるダンジョンのボスのレアドロップアイテムだ。名前は、《煙幕石》。

名前の通り効果は、割ると煙が出てくるもの。ここ一番で使おうと思っていたが、仕方ない。

今がここ一番だ。

まちがいない。

「くうう…!次に戦う時が来たら絶対に貴様を倒す!覚えておけ!」

「あーもう逃しちやつたじゃーん!今度は絶対逃がさないからー!」

妙に物騒な言葉が聞こえたが、無視。殺害予告された気がするが、ムシムシ。

十分過ぎる程ヤツらから離れたところで一度止まり、さつきサリーさんから送られて来ていたらしいメッセージを開く。

「えーつと…サリーさん達の現在位置か」

以外と近いけどぶつちやけもう走りたくない…

『少し遅くなるかも』とメッセージを送り、

「ハア…このイベント嫌いだ…」

とてつもない精神的な疲労感を覚えながら、また歩き始めた。

こうして、俺は何とかこの地獄から脱出したのだった…！

この運営、嫌い

地獄から脱出した俺は、メイプルさん達と合流し、ボスからドロップしたらしいモンスターの卵から生まれた亀と狐——『シロップ』と『朧』と遊んだりレベル上げをしているメイプルさんとサリーさんをぼんやりと見ていた。

「あはは、くすぐりたいよー!」

「んー…もふもふー……」

美少女二人が動物と戯れる光景。

普通だったら目を輝かせて喜ぶだろうが、恐らく今の俺は真逆。『今自分の目は死んでいるだろう』とか超くだららないことを考え始めるほど疲れている。

自分で言うのも何だが、何せあの状況から逃げ出してきたのだ。疲れるのは無理もないことである。

「うーん……よし!朧たちのレベルも3まで上がったし、もうそろそろ探索に戻ろっか!」

「そうしょ——っ!」

テンション高えな2人とも…俺は死にそうだよ…

「マジですか…で、どこに行く?」

「とりあえずは森を抜けよっか。いつまでも休憩してるわけにはいかないからね!」

「うん!分かった!」

「りよーかい」

こうして、俺たちは探索を再開し始めた。

そして15分後。

「お、もう抜けた!」

「おー……砂漠だ」

「砂漠は砂に足取られるから嫌いなんだよなあ…」

俺たちの目の前に広がっているのは広大な砂漠だった。

ところどころにサボテンが見えるくらいで一面砂である。

プレイヤーの姿は今の所見えない。

「行ってみようか」

「そうだね」

「二人とも、シロップと臍は引っ込めといた方がいいよ」

「…?なんで?」

「シロップは砂丘をまともに登れないだろうし、臍は砂まみれになるだろうからね」

「なるほど、確かに!」

砂漠へと足を踏み入れる。

「喉が渴いたりしないのは助かるね」

「確かに、それだったら探索出来ないもんね」

「あー……暑〜」

脱水症状はこのゲームに存在しない。

砂漠だからといって気温でダメージを受けたりはしない。まあ暑い事には変わりはないのだが。

砂に足を取られるため、探索は快適とは言えないが俺たちはゆっくりながらも砂丘を乗り越えて着実に先へ進んでいく。

そして、十数回砂丘を乗り越えてようやく遠くにオアシスを見つけた。

「あつ!あそこで休憩できそうだよ!」

「蜃気楼じゃないといいけど…」

「水に入ったらそのまま落下なんてもはやドツキりなんだけど」

「あはは、確かに」

サリーさんがぐつと伸びをする。

サリーさん達も俺もこの日は既に長時間の戦闘をしているのだ。

疲れるのも無理は無いことである。(二回目)

メイプルさんはぐつたりと地面に寝転がる。

「んー……ん?二人とも!誰か来るよ!」

メイプルさんが起き上がり大盾を構える。

誰か来たか。索敵スキル使っておけば良かった。

少し遅れ、俺とサリーさんも武器を構える。

「おつと…先客か。それも、メイプルにレインとは……私も運が悪い」

やってきたのは和服を着た女性。

上半身は桜色の着物。

それに紫の袴。

そして刀を一本装備しているのがぱつと見て分かる特徴だろう。

「あの人前回イベント七位の人だよ」

「えっ!?! 本当!?!」

「結構調べてあるから、それくらいなら知ってるよ」

「いや普通知ってるでしょ!?! 上位くらい調べなよメイプルさん…」

「ああ、話しているところ悪いが…出来れば見逃していただきたい」
「どうやらこの女性に戦闘の意思は無いらしい…本心ではないだろうが。」

「…こいつ明らかに俺を狙ってやがるな…第一回イベントでこいつとは戦った…気がする。だからか…」

「…………無理だと言ったらどうしますか?」

「その時は…仕方ない。誰か一人は道連れにしてみせようじゃないか」

「こいつ明らかに俺を狙ってやがる! (二回目)」

「それなら残った人がメダルを総取り出来る私達の方が有利だね」

サリーさんが呟く。

「おお、確かに。」

「……………あつ」

「やっちやう?」

「やっちやおうか?」

「やっちやいます?」

揃って女性を見る。

一人でも生き残ってこの女性を倒せれば俺たちは最低限目的を達成出来る。だが女性はそうは行かない。一人で三人を相手にする、つまりは絶対的不利。

まあつまりこの状況では相当のバカでもない限りー

「【超加速】!」

逃げるよね。

だがそれを予想していないとも思ったか。

「【超加そ…】

「サリーさん、俺が追う。後からメイプルさんと一緒に来て」

「……分かった」

あの女性は俺と戦いたがっていた。…自意識過剰かもしれないけど多分。

「誘いに乗ってやるよ、前回7位のカスミさん」

すっかり一対一やるのはなんか久しぶりな気がするな。そう考えると自然に顔に笑みが浮かぶ。

さて、追いますか！

「【疾風一陣】！」

元のAGIの高さとスキルによる加速で直ぐに追いついた。

カスミさんが驚いた表情を浮かべる。しかし、その表情は直ぐに好戦的な笑みに変わる。

「まさかお前とまた戦えるとはな。そのスキルは何だ？」

「企業秘密。教えてやらん」

「つれないものだ…なッ！

「一の太刀・陽炎】ッ！」

カスミさんの姿が揺らいで消える。

そして、次の瞬間には目の前に現れた。

繰り出されるのは横薙ぎの一撃。

それを下から右手の剣を斬り上げて弾く。

「それは前に見たぞ」

「なっ…!？」

「今出せる本気で来い。来るなら応えてやる」

「……お前相手に本気を出さないでは勝てないか」

ポツリとそう言ったカスミさんの雰囲気が一変、いや、見た目すらも変わっていく。

黒髪は雪のような白に変わり、その黒い瞳は緋色に染まっていく。

カスミさんの周りには着物と同じ桜色のエフェクトが輝く。

「……………」

集中。

これは知らない。

見極めなくてはいけない。

剣を肩に担ぐように構え、スキル【氷華閃閃】を発動する。

連撃数は最大の10。

【氷華閃閃】

【終ワリノ太刀・朧月】

太刀筋の見えない連撃が襲い来る。

あまりの速度に刀身が揺らぎ、消えてしまっているかのようにだった。

視覚でその太刀筋を捉えることは不可能だろう。

ならば。

「…ッ…!?!」

ならば見ない。

見えないならいつそ目を閉じろ。

音と空気の振動を感じ取れ。

その一撃一撃が必殺の威力を持つ連撃を防ぐ。

1、2、3、4、5、6、7、8、9、10。

【氷華閃閃】スキルが終わる。

だがまだだ。

カスミさんの攻撃はまだ終わっていない。

大上段からの一撃が迫る。

右手はスキルの硬直で動かない。ならー

「ぐ…うぁあッ!!」

大上段からの一撃を左手のサーベルで何とか受ける。

その瞬間、必殺の一撃を受けたサーベルが激しい金属音を起こし砕け散る…!

そして衝撃を全て受けきれなかったらしく、後ろに倒れる。

「く………!」

だがまだ終わらない。

目を開く。剣筋ではない、姿勢を見る。

カスミさんの姿勢を見ると、恐らく中段からの突き…だが、連撃に繋げる姿勢ではない。つまり、これが最後。これを防げば勝ち。ならばー

俺の勝ちだ、カスミさん。

「はあああああッ!!」

裂帛の気合いを放ちながら、カスミさんが攻撃を当てようと前に体重を乗せる。

そんなカスミさんを見ながら、背中が地面に叩き付けられる寸前、
【体術】スキルを発動させ、俺は右足を鋭く振り上げる。

「おおおッ!!」

短く吼えながら、全身をコンパクトに回転させ、カスミさんが剣を握る右手の甲に蹴りを叩き込んだー!

「ぐうっ…」

大したダメージは無い。

しかし、スキルがフアンブル^失し、カスミさんの武器が手から離れる。得物を弾き飛ばされ呆然としているカスミさんをよそに、俺は起き上がり砕けたサーベルの柄を拾う。

「壊れちゃったかー…まあともあれ、俺の勝ちだ」

カスミさんは俺を見るとにっこりと笑ってそのまま背中から倒れた。

「ああ、私の負けだ。一思いにやってくれ」

髪と目の色も元に戻っている。

オーラも消えていた。

「危なかったよ。いいスキル持ってたな」

「そちらこそ。まさか見ないで私のスキルを捌くとはな」

あれは公式のスキルじゃないぞ。

言うなれば『システム外スキル』というやつだ。

もちろん現実でやれと言われても無理だ。これは余計な雑音がな
い仮想世界だからこそ出来る芸当だ。

まあ言つてやる義理もないし、言わないけど。

「次は負けんぞ」

「次も負けねえよ」

そして俺は倒れたカスミさんにトドメを刺そうと剣を刺
す————

「あああああああつ!?ちよつ、止まらないいいいいいい!!」

—————ことが出来なかった!

叫び声に反応し思わずその方向を見ると、そこには砂を巻き上げて
砂丘の斜面をゴロンゴロンと転がってくる紫色の塊があった。

「えつちよつ!メイプルさん!?!」

そう、その塊はメイプルさんのスキル「ベノムカプセル」だった。

サリーさんも中にいるようだが…制御出来ないのか!?

「ああああああああああああああああああ!!?!止まってえ
ええええええ!!?!」

あこれダメだわ。

俺は咄嗟に腰のポーチから毒無効ポーションを出し、瓶を砕く。

二人が俺たちの元に飛び込んでくる。

派手に砂を巻き上げて倒れ込む。

そしてその瞬間。

「あー。」

地面が抜け落ちた。

「はっ!!」

「くっ、逃げられない!」

「え?・え?」

「またこんなかよもおおおおおお!!?」

最近横やり入ること多すぎだろ!

ふざけんなああああああああああああ!!?!!?

空中でバランスをとって地面に降り立ったのは俺とカスミさん。

もう二人は地面にカプセルがぶつかった瞬間にカプセルが破裂したため放り出され毒塗れの状態で伸びている。

幸いそれほど高くはなかったようでダメージはゼロだ。

「ど、どういうこと?」

メイプルさんが起き上がりながら尋ねる。

「人数で反応するダンジョンじゃない?メイプルさんたちが落ちてきて急に反応したし」

どうしようか…ダンジョンなんだから出口はあるはず…ん?

腕に違和感がある。ので、腕を持ち上げてみる。するとー

俺たち四人の腕が黒い鎖で繋がっていた。

「「「あ?」」」

鎖の長さは一メートルと少し、普段通りの動きは絶対に出来ない。

「この…この…このクソ運営があああッ!」

俺以外の三人が状況を把握するのにはもう少しの時間が必要だった。

どうも、《特級フラグ建築士》レインです。

「……………すまない、とりあえず状況確認を……………」

「俺たちは一人死んだら全員死ぬ呪いをかけられてダンジョンに放り込まれました。頑張つて脱出しましょうー」

「おー」

「いや軽いね!？」

そう。俺たちにつけられた鎖は動きを阻害するだけでなく、一人死んだら全員死ぬとかいう頭おかしい呪いがかかるクソアイテムだったのだ。

運営の趣味の悪さが目に見える…

「…三人とも、取り敢えず探索しないか?ここに居ても何も始まらないし、それにダンジョンを攻略したら鎖も外れるかもしれないからな」

「外れなかったらGMコールしまくって運営に迷惑かけてやる……………」

「それ垢BANされるよ」

「デスヨネ」

俺たちは目の前にある砂岩で出来た階段を下っていくことにした。

「ボス次第では詰んでるかも」

「範囲攻撃持ちでないことを祈ろう」

「私が守るよ!」

メイプルさんが大盾をグツと構えながら言う。

うわーたのもしー…まあこの穴に落ちたのもメイプルさんが原因だけど…

メイプルさん以外が周りを警戒しつつ階段を下りていく。メイプルさんはキョロキョロと周りを見回している。

「じめじめしてきてない?」

「え?あー…そうかも」

「壁も洞窟の壁になっているな。さっきまでは綺麗に整えられていた

が…でこぼこだ」

「鍾乳洞みたいな感じか」

階段を下りきった先にあつたのは広い空間だった。

青みがかつた岩石で出来た地面と壁はぬるぬるとしていて気持ちのいいものではない。

「うわっ！」

メイプルさんが滑ってこけた。

地面もぬるぬるしていて気をつけないとこけそうだ。

「見たところモンスターはいない…か？」

「そう…だね。いなそうかな？」

ただっ広い空間には水の落ちる音以外に何の音も聞こえない。

「進もう。ゴールがどこかは分からないけど…複雑そう」

現在いる空間からは何本も分かれ道が伸びている。

そのどれもが高い天井だ。今の空間と同様の高さがあり十メートルぐらいはある。

「上からの奇襲に警戒だね」

「私もそう思う。その可能性が高いだろうな」

「じゃあ、私はかばう準備をしておくねっ」

「頼むよ、メイプルさん」

分かれ道のうち一つを選んで奥へと進んでいく。しばらく進むと、再び広い空間に出た。

「ここも…何もいない」

「警戒させるだけか？流石に遭遇率が低すぎる。ゼロっていうのはな…」

「探索系ダンジョンで、ボスしかいないかわりに時間がかかるとか？」なるほど、そう言う考え方もできるな。

「分かれ道も多いし、確かに時間はかかりそうだね」
再び歩き出す。

右へ左へ、上へ下へと歩き回るが、一向にボス部屋は見つからない。

そして、モンスターとも一度も遭遇していない。

「あー…行き止まりだ…」

「ふう……引き返すか」

「はあ……」

「……………ん？待って三人とも！」

メイプルさんに引き止められる。

「どしたの？」

「あれ見て！」

メイプルさんが壁を指差す。

メイプルさんが指差していたのは行き止まりの壁のすぐ手前にある小さな水たまりだった。

そこからはポコポコと泡が発生していた。注意して見ていなければ見逃してしまいそうなものだが、全くと言って良いほど変化の無いこの洞窟内での僅かな違いをメイプルさんは感じ取ったのだ。

偶然かもしれないがファインプレーだ。

近寄って見てみるとそこには銀色のメダルがあった。

メイプルさんがそれを拾い上げると泡も止まる。発見させるための仕掛けだったのだろう。

「うわ…全然気付かなかった」

「私もだ」

「これはメイプルさんのね」

メイプルさんが見つけたのだからメイプルさんのものだ。

大体俺はプレイヤー狩り（自分からではないが）とゴブリン戦で銀メダルを計10枚以上は持っている。

元々金メダルも一枚持ってたし、死ななければこれからメダルを手に入れてもメイプルさんたちに回すつもりだ。

まあそれはさておき、

「戦闘だけでぱぱっと終わるダンジョンの方が得意かなあ」

「私は特にそう！」

「大体のプレイヤーがそう言うだろうね、探索系スキルなんてあんまり無いし」

「ああ、私も戦闘の方が得意だな」

話しながら歩くと、再び大広間に出た。

まるで蟻の巣のような構造だ。

といっても蟻など一匹もないのだが。

蟻でもいたら遠慮なく潰していただろうし…普通のサイズだったらだけど。

ゲームによく出てくる大きい虫は嫌いだ。だってキモいもん。

あとはナメクジとかカタツムリも嫌いだ。ぬるぬるだから掴まれたら鳥肌立つし…

そして数時間後。もはや俺たちは疲労困憊だった。今すぐにでも探索を止めて眠りたいくらいだ。

歩き、歩き、何度目か分からない広間が通路の先に見えてきたその時。

「じ、地震か!？」

「違う、地震じゃない!…何かが来る!」

グチョグチョと気持ちの悪い音が…あれ?なんか…嫌な予感が…

俺たちがいる通路とは別の通路から、それは姿を現した。

……うぎやああああああ!!!

天井の高さから推測するに、高さおよそ5m!体長およそ7m!

俺の大嫌いな巨大なカタツムリがズルズルと広間を横切っている

!

発見してから速攻で隠れるまでのその刹那、俺は数時間前の自分の思考を思い出した。

『ナメクジとかカタツムリも嫌いだ』

その思考が俺の頭で反響する。あれ…?これ…

フラグ建築したの俺じゃねえかあああああああ!?

そしてフラグ回収乙です!!?じゃねえよバカ!

だが幸い俺たちには気がつかなかつたようで、別の通路へと消えていった。

「どうする……どうする……」

「……………やばい。あれは、やばい」

「HPバーが無かった……」

「ど、どうやばいの?」

メイプルさんが恐る恐る聞いてくる。

「メイプルさん……HPバーが無いってことは……倒せないってことだよ」

「鉢合わせないように安全地帯を探さないと……アウト」

マズいマズいマズいマズい!!?鎖で全員繋がれてるから囿は無理!でもかと言ってカタツムリが一体しか居ないなんて保証は無い!

……………クソツツ!やっぱりで急いで出口を目指すしかないか!

「出口に向かうしかないか……!」

「出口はどっち!」

「あっち!早く行くよ!」

数時間の探索の成果だ。出口の位置を絞り込めた!

「……来たぞ!」

「もう一体……!」

「違う、一体じゃない!まだ増えるよ!というか二人ともさっさと【超加速】使つて!逃げるよ!」

ちくしようツ!さすが運営ツ!俺が嫌がることを平然と、そして的確にやってのけるツ!そこに痺れもしないし憧れもしないけどとり

あえず死んでください!バ——カ!!!

「サリ——行くぞ!」

「うん、【超加速】！」

「ごめんメイプルさん、ちよつと我慢して！」

「えっ、ちよつ、うわああああああ!!！」

サリーさんとカスミが、スキル【超加速】を使って走り出す。

俺は素のAGIで追従する。この二人のステータスとの差のおかげで二人が【超加速】を使っても普通に走れば追いつけるのだ。

「恐らく出口はここからまっすぐ！急ぐよ！」

「了解！」

「うわああああ!!ひやああああああ!!」

ちなみにメイプルさんは引きずられている。着いて来れないからね。

どんどん走っていき、俺が指示した場所で全員が停止する。

「くっ…行き止まりか?!」

「いや、上に穴がある！あれが出口だ！」

ここからおよそ10mの高さに横穴がある。

あれに速攻で飛び込むしか助かる道はない！

「あれ入れるかな?!」

「うーん……【跳躍】では届かないと思う……」

「私になんとかする！サリーは【跳躍】を……！」

その瞬間、全員の表情が凍る。

通路の至る所から何匹もカタツムリが姿を現したのだ。

……もう迷ってる時間はない……!

賭けになるけどやるしか……!

「任せて！」

それだけ叫び、俺は【跳躍】スキルを発動してからAGIに物を言わせて跳んだ！

打ち出された砲弾のような勢いですつ飛んだ俺は、なんの問題もなく横穴に入った。

しかし、あくまで俺だけ。ほかの三人は鎖でつながれた状態のまま宙ぶらりんだ。

「引っ張りあげるよー！ふっ……!……!……!ふんっ……!」

だめだ重い」

「なあサリー、あの男一回殺していいか？」

「全面的に協力するよ」

「ちよだめだめだめ！」

殺されるのは勘弁だから鎖がなくなった瞬間全力で逃げよう…

ていうか三人もいて全員まとめて引つ張ったら重いに決まってるだろうが。

まあ主にメイプルさんの盾のせいだが、さすがにそんなこと言うほどアホではない。

「はあ…【三ノ太刀・孤月】！」

カスミの体が空中で加速する。

システムにサポートされてカスミの体が撃ち出されるように上に跳ね上がる。

もちろん二人も引つ張られる。

カスミの体は空中で一回転して斬撃のエフェクトを残しながら前方向に進みつつ落ちていき、横穴に着地した。

残りの二人も無事着地に成功。

「はあ〜疲れたあ…」

「ほんとにね…」

「全くだ…」

「精神的にもね…」

そして気付くと、俺たちを繋げていた鎖は消滅していた。

「鎖が消えた…ってことは終わりか」

「そうだねー…」

改めて周りを見回すと、その部屋…というか横穴には、宝箱が5つとワープの魔法陣があった。

「宝箱…：開けていこうか」

「そうだねー！そうしよう」

全員一つずつ宝箱を開けてみる。

「私のは槍だったよー！」

「私は大盾だな」

「私のところは杖だった」

三人がそれぞれ中身を手に持って見せ合う。

さて：俺の方は：片手剣？

俺の開けた宝箱の中には薄い赤色のオーソドックスな片手直剣が入っていた。

「お」

結構斬れ味良さそうだな。いい剣だ。

『シナジーブレード』

【STR+42】

スキル【共鳴の光】シナジーライト

スキルついてんじゃん！

プラスされるSTRも結構いいし、当たり武器だということは確定。

でもとりあえずスキル確認しないと。スキルがクソゴミで使えない可能性もあるからな。

【共鳴の光】シナジーライト

このスキルはこのスキルが付与されている武器（以下、共鳴武器と略す）の逆手に武器を持っていると自動発動する。

共鳴武器の逆手に持っている武器のランクが高ければ高いほど共鳴武器の性能が上がる。

って書いてあるけど…

つまりはこの「シナジーブレード」を左手に持っていたとしたら、右手に持っている武器の性能が高ければ高いほどこの剣の性能が上がる。

ふーん、へー。

なるほどなるほど。

そうかそうか。

ふっ。

「勝った…！」

「何に？」

「どうしたの、そんな夜○月みたいな顔して」

…!? いや確かにゲス顔だったかもだけど!?

…なぜ俺が夜○月化したか、お分かりいただけただろうか。

まあ説明すると、シナジーブレードは逆手に持つ剣の性能次第で性能が変わる。

そして俺が今使っている「氷華の魔剣」は、こう言うては何だが恐らく現環境トツプクラスの性能だ。

つまりい……

シナジーブレードがクソ強くなるのだ！（小並感）

やったぜ！

「まだ後一つ宝箱が残ってるね」

サリーさんが残り一つの宝箱に向かう。

俺たちも後を追ってきてサリーさんが開けている宝箱を後ろから覗き込む。

「…巻物が4つだけ、かな」

メダルが無いかどうかを確認して、巻物を宝箱から出す。

「どれも同じ巻物だね。スキル【鼓舞】を習得出来る」

サリーさんが全員に同じ巻物を渡す。

それをインベントリに仕舞い込めばこの部屋での作業は終了だ。

「じゃあ、出ようか？」

「そうだね…この洞窟は大変だったなあ…疲れたよ」

「ほんとにね…」

そして全員が魔法陣へ乗り、洞窟を後にした。

そうして、俺たちは元の砂漠に戻ってきた。

「はあ…夜空だ…」

「そんなに長くいた訳でもないのにね」

「ああ、何故だか嬉しい」

「カタツムリはもう懲り懲りだ…」

洞窟では見ることの出来なかった夜空は解放感に満ちていた。

…ていうかフラグ建ててスミマセンでした。

「そうだ…私達、カスミと戦うつもりだったんだっけ…もう戦意が湧かないや」

サリーさんは協力し合った後で再び戦闘に持ち込む気にはなれなかったようだ。

もちろんメイプルさんもだ。

まあ俺は敵が仕掛けてきたら殺るだけだから別にどうでもいいけどな。

「私も戦う気は無い…まあ、最初から無かったがな」

「そうだ！なら、フレンド登録しようよ！」

「ん、別に構わないぞ」

俺たちはそれぞれフレンド登録を済ませると寝転がって空を見上げた。

疲れからか、安心からか、しばらくの間はそうしていたいと思ったのだ。

「カスミはこの後どうするの？」

「そうだな…取り敢えず三人とは別れようと思う。フレンド登録もしたことだしイベント後にもまた会えるしな」

「私達と一緒に来てもいいけど…」

「うん、いいよいいよ！」

やめとけやめとけ！さすがに金メダル三枚も抱えて動きたくねえよ！

「はは…嬉しいが今回は止めておく。金メダルが一箇所にも3枚もあれば戦闘回数も増えそうだしな」

カスミの言うことももつともだ。

カスミとメイプルさん、そして俺は金メダルを持っているのが他のプレイヤーにバレている。

当然それを狙う者も多い。

3枚もあるとなれば尚更だ。

前みたいに集団で仕掛けてこないとも限らないしな。

「そっか…残念だけど仕方ないね」

「ああ…よつ、と！私はもう行くとするよ」

カスミが立ち上がり砂を払う。

「頑張っつてね！」

「3人もな」

カスミは最後に俺たちに手を振って俺たちから離れていった。こうして、奇妙な共闘は幕を閉じたのだった。

手の平くるっくるですが何か？

「俺たちも行くか」

「そうだね」

「とりあえず砂漠を抜けよっか」

砂漠には身を守るものがなんにもないから急がないとな。

「広いなあ……」

「そうだね……」

「そりゃあね……」

砂丘を乗り越え乗り越え先へ進むも、同じような風景が続くばかりだ。

大きな砂丘があちこちにあるために見通しが悪くどちらに行けば砂漠を抜けられるのかが分からない。

それに、モンスターがいない訳ではないのだ。

正直なところ、この状況での戦闘は避けるに越したことは無い。

「この砂丘を越えたら一旦休憩にしない？」

「うん、そうしよう」

急斜面を手をついて登りきる。

すると、そこには今までとは少し違った風景が広がっていた。

「砂丘が無い？」

「真っ平らだね！」

目の前に広がっていたのは起伏の無い砂漠だった。

砂丘など一つもなく、夜で無ければ遠くまで見通せる状況だっただろう。

「こっちに行ってみる？」

「俺はどっちでも」

「そうしよう！こっちのほうが歩きやすいしね」

意見が一致したため、砂丘を滑り降りて再び歩き出す。

「昼間なら何か見えてたかもね」

「確かにそうかもね。ていうかイベントって後何日だったっけ？寝てないから忘れた……」

「あと三日。そのうちに…あつ、そういえばレイン君、今何枚メダル持ってる?」

「ああ、俺の分は集まったから俺には回さなくていいよ」

「あ、そう?じゃあ私とメイプルで合わせて9枚かな」

「うーん…ちよつと厳しいかな?」

「PKでもしないと厳しいと思う」

「うーん…そっか」

どうしてもというならそれも選択肢に入ってくるだろうが、誰がメダルを持つているかも分からないためダンジョンを探すのと同じような難易度だろう。

そしてぶつちやけると俺はもう対人戦やりたくない。

だって疲れるし。

「まあ、そういうのはプレイヤーと出会ってからでいいよ。相手が戦うつもりなら返り討ちにする」

「うん、そうだね」

そんなことを話しながら、ひたすらだっ広い砂漠を歩き続けた。

暗くて先はよく見えていなかったが、次第に木の葉が風でガサガサと揺れる音が聞こえ始めたことで、砂漠の終わりを知らることが出来た。

「どんなモンスターがいるか分からないから注意して」

「おっけー!」

「了解」

暗い森の中を進んでいくこと三十分。

俺たちは一つの洞窟を見つけた。

「入ってみよう。それで、浅そうなら拠点にしちやおう」

「私が前に行くよ」

もしかしたらまた深い洞窟かもしれないと思うが、この洞窟は五メートル程奥に伸びているだけの何も無い洞窟だった。

二人はやつと休めると地面に寝転がる。

「疲れた…」

「クタクタだよ…」

「じゃあとりあえず二人寝て。俺は偵察してくる」

俺の言葉に、二人が目を丸くした。

「いいの？」

「…いやいや、女子二人が寝てる横で男一人が寝るってのは…」

ちよつと…ね？

精神的に疲れるから勘弁してください…

「……わかった。お言葉に甘えるよ」

「ちゃんと休んでね？」

「そりやもちろん。ちゃんと休むよ」

そう言っつて、地面に寝転がった二人を置いて、俺は偵察に向かった。

「さてと…戦闘はしたくないし…あ、そうだ」

戦いたくないなら見つからなければ良い。

当然の理屈だが、普通に行動をすると見つからないのは難しい。

という訳で木の上を飛び移って行くことにした。

「よつ…い…ほいつと！」

木に登り、周りを見渡すと、プレイヤーは視界の中にはいなかった。

「今のところはいないか…」

確認すると、近くの木に飛び移り、移動して行く。

そして、ずっと偵察している間に最初の木登りから数時間がたち、

朝日が指し始める。

「やっぱ早朝は全然ないか…ん？なんだアレ…祠か？」

俺がようやく見つけたのはプレイヤーでもモンスターでもなく、かなり古臭い祠だった。

「見てみるか…よつ！」

木から飛び降り、祠の中を覗くと、魔法陣がポツーンと寂しく一つ

だけ佇んでいた。

「うわあ、なにこれ怪しい…」

明らかにダメそうな感じだ。

突然だが、この魔法陣を見た人の選択肢は三つほどある。

1。パーティを呼んできて、全員で入る。

2。入らない。

3。これは余りおすすめしないけど…一人で入る。

まあ無難なのは1かな。

備えあればなんとやらって言うし、人数は多いに越したことはない。

対して3は強い敵が出てきた時、かなり苦労する。

実際、レイドボスとかに一人で挑むような物だからな。

…え？俺？俺は………

3 ですけど？

レイドボスに単独特攻？上等だよ。

実際別ゲーでフロアボスに単独特攻して一回玉砕、一回撃破の記録を持つ俺ならいける!!？（隙自語）

そう考え、迷わず魔法陣に踏み込み………

「あーもう二人呼んでくればよかったアア！」

入ってから約2分も経たず、猛烈に後悔しています。

「はあ……そんなんありかよ！クソ運営が！」

メイプルさんたちを呼んで来なかったことにめちやくちや後悔したけど今はそんなこと気にしてる場合じゃない。

魔法陣に踏み込んだ後に俺が見たのはめちやくちやデカイトリケラトプスのようなモンスターだった。

攻撃パターンに関しては今の所は単調だし、攻撃は当てられるのだが……

手始めにと斬りかかってみたら剣を弾き返された。しかも体力は1ドットすら減っていないという。

つまりコイツはメイプルさんレベルに硬いチートモンスターだと言ふことだ。

あれ。

無理ゲーじゃね？これ……

……い、いや！

まだ、まだ終わらんよ！

「クソっ！【フリーズドブレス】！」

俺はトリケラトプス擬きの突進攻撃を回避しながら【フリーズドブレス】を放った。

剣から水色のビームがトリケラトプス擬きに向かって飛んでいき……当たった………

瞬間に反射されてきた。

「はあ!？」

お前！何でもかんでも反射しやがって！

てめえ一方〇行アクセラビータ（規制音）かよ！

なんだなんだよなンですかア!?

愉快に素敵に決まっちゃまったぞオ!?

（テンション崩壊中）

…うん？

なんかトリケラトプス擬きがかつちを見てニヤリと……………

「アア…!?ふっぎけてんじゃねエぞツ!!」

トリケラトプス擬きが反射したレーザーが俺に迫る！

「舐めやがってエエエエツ!!」

俺が咄嗟に剣を翳すと、レーザーと剣が衝突した。

「う…ああああツ!!」

数秒後、俺の剣がレーザーを断ち切った。

「はあ…はあっ…」

クソっ！俺が一方〇行みたいになってどうする！

打開策…何か！

その時。

俺が必死に今あるスキルでの打開を考えていた、その時。

ピロン♪ピロン♪

場違いな音が2つ、洞窟に響いた。

その音は。

新たなスキル獲得の、音だった。

弾丸

「ッ……!?!」

もしかしたら今までやった中で最速かもしれない程の速度で、獲得したスキルを確認する。

俺がたった今獲得した2つのスキル。

その中にこの状況を打破出来るものがあるなら!

トリケラ野郎の攻撃を避けながらスキル効果にざつと目を通す。

……いける!

こいつに勝つ道が、ようやく見えた!

「……いやあ、ありがとうトリケラ野郎。お前のおかげで良いスキルが手に入ったよ……っていう訳で早速だけど——」

笑みを浮かべ、再び剣を構える。

——さて、と。

「実験台になってもらおうか……!」

トリケラトプス擬きと相対する。

こいつには普通の攻撃が全くと言っていいほど効かない。

……と、勘違いしていた時期が俺にもありました。

普通に考えれば、そんなことはありえない。

いくらあの性悪^{頭おかしい}運営連中でも、絶対に倒せない敵は用意しないはず。

そんなことしたらGMコールが殺到し、苦情も来るからな。

まあつまり何が言いたいかと言うと、どこかに弱点があるということだ。

そこで、さつき習得したスキルの1つが役立つ。

「【心眼】……！」

スキル【心眼】。

相手のレベル、ステータス、武器……まあこいつにはないけど。

そしてもう1つ——そいつの弱点を見抜くことが出来る。

視界がサーモグラフィーカメラを覗いた時のような色に染まりだし、視界の全てがその色に塗り替えられた瞬間、ヤツのステータスが見えた。

地竜

Lv67

HP 998 / 1000

MP 300 / 300

【STR 350】

【VIT 8500】

【AGI 0】

【DEX 0】

【INT 500】

装備

なし

弱点

首・目

……うん。

これ は ひ ど い 。

なんだこのメイプルさんの上位互換……

ふざけるなッ！ふざけるなッ！バカヤロオオオオ！！

(某正義の味方感)

あと、これ以上ないほどに申し訳程度に削れてるHPはなんだ！

『2』しか削れてねえじゃねえか！

あんの性悪運営が…！

思わず俺も、中指を立てちやうね☆

…んっんん。

咳払いをし、気分をリセット。

気を取り直していこう。

表示された弱点は首と目…か。

まずは目を潰す。

目を潰したら少しくらい隙が出来るはず。

そして、その隙の間に首を斬る！

「ふう…行くぞー！」

左右の剣のグリップを握り直し、トリケラ野郎に向けて真っ直ぐ走り出す！

「永久氷塊」

スキルで氷を創り、それを足場にして跳ぶ。

「グガアアアアッ!!」

トリケラ野郎も俺の狙いを察したのか、角を振り上げ攻撃してくる。

それを空中で身をひねって回避。

そして弱点の1つである目を――！

「エンシエント・ストライク太古の一撃」ツー！」

空中からの勢いを全て乗せて、貫いた！

「グガアアアアアッ?!」

驚くようなトリケラ野郎の叫びが響く。

だけど…まだまだ！

「跳躍！」

首の上に跳び、そのまま首を斬りつける！

「う…おおッ！」

「グギガアアアアアッ！」

さっきの目に対する攻撃と合わせて、4割近く体力が削れた。いける。

全力で首に攻撃しまくれば倒せる！

そう考え、スキルを首に叩きこもうとしたその瞬間――

俺は壁に叩きつけられていた。

…まあ、そんなに上手く事は運ばない。

それを俺は、体に赤いオーラを纏わせたトリケラ野郎を見て実感した。

「ウオオオオオオガアアアアッ！」

(明らかに知能が無くなったって感じ…狂化系のスキルか?)

このレインの予想は当たっている。

トリケラトプス擬きが発動したスキルは、「知能」のステータスを代償に【筋力】、【敏捷】を跳ね上げるといふスキルだ。

「正直やりたくないけど…【心眼】」

地竜

Lv67

HP 628 / 1000

MP 300 / 300

【STR 350 > +700】

【VIT 8500】

【AGI 0】

【DEX 0】

【INT 500〈1500〉】

装備

なし

弱点

首・目

「おっふ」

STRがさっきの3倍になっている。

敏捷は元からゼロだったからか、そのままだ。

代わりにINTが0になっているが：

「あいつそもそも魔法使うのか…？」

そう。レインはこのモンスターが魔法を使ったところを見てすらないのだ。

「…まあいつか…」

「…ってか、危なかったー…」

今さっきレインが受けた攻撃は、本来ならレインの体力を余裕で消し飛ばしていた。

では何故レインが生きているのかというと、とあるクエスト中にラッキーで手に入れた超レアアイテムのおかげである。

【守護人形】。

本来なら死亡するダメージを一度だけ無効にしてくれる優れものだ。

病気の子供に薬草を持つてくる簡単なクエストだが、ごく稀に、元気になった子供がお礼にこの人形をくれる。

…曰く、これを貰った人たちの心境はたった1つらしい。

(なんでそんな物持ってたんだ…)
……………らしい。

——場面は戻り、トリケラトプス擬きと対峙するレイン。
狂化したモンスターを目の前に、思考を巡らせる。

「STR1000って…馬鹿なの？…で、でもまあ」
一発くらい耐えられるかな、現実逃避しようと言おうとした瞬間。
トリケラトプス擬きが角を振って攻撃してくる。

「おっ…と」
ステップで余裕を持って躲すが…

ズドガアアアアン!!

さつきまでレインが立っていた場所が物凄い音を放って陥没した。

(いや絶対無理だこれ——!?)
まともに喰らったら俺の体力の150%ぐらい吹っ飛ばされるわ
!)

正にその通りだ。
というか、レインのVITでこの攻撃を受けたら、ワンパンどころ
の話ではない。

体力ゲージが二本あっても耐えきれない。
つまり、

一撃でも攻撃を受けたら終わり。
だがそれでも。そんな状況でも、レインは諦めていなかった。
それどころか。

勝ち筋を見極めるように、トリケラトプス擬きを睥睨していた…!

「攻撃は受けられない…でも長時間攻撃を避け続けるなんて、俺には…」

不可能だ。

サリーさんじゃあるまいし…

「けど、スキルを使ったら硬直…」

そう。スキルには発動した後の硬直時間が存在する。

その隙に攻撃されたらもう終わり。

「…はあ」

…やっぱり方法は1つしか残されていなかった。

無謀とも言える方法の、内容は――

一撃で倒す。

隙が出来た瞬間に、さつき取得した強そうな攻撃スキルをブチ込む。

…これは、まあ…賭けだ。

スキルが強くなかったら。

スキルが強かったけど、削りきれなかったら。

そもそもスキルを発動出来なかったら。

このパターンの場合、俺は即死ぬだろう。

だが、やるしかない。

これしか道は無いのだから――！

「…やるぞ」

剣を構え直す。

そして――

「…ゴ―！」

自分自身に喝を入れ、走り出す！

その瞬間、トリケラ野郎が何かを吐き出す。

それを横ステップで回避するが、ドンドン吐き出してくる。

「……………」

それを俺が全て回避すると、痺れを切らしたのか。

前足を持ち上げて思い切り地面へと叩きつける！

「……………!?!」

次の瞬間、地面が地震のように揺れた！

まずい…足場が不安定になる…

不安定な足場じゃ回避なんて出来ない！

「…ふっ…」

そう判断した俺は、思い切り空中に跳んだ。

…しかし、空中で止まった瞬間に自分のミスに気付いた。

…空中で角避けられるわけねえじゃん…

…トリケラ野郎が…ニヤリ、と笑った。

そんな事を考えている俺に向かって、角が向かってくる。

そして――

「【永久氷塊】」

『ガアアン!』

衝突した。

「グオオツ!?!」

俺の削った氷に…ね。

まあ…

油断大敵ってヤツかな？

避けられないと言ったけど、スキルで受けられないとは言ってな

い…!!

それよりも。
ようやく出来たぞ…！

隙が！

トリケラ野郎の振った角が俺の氷に刺さって抜けないようだ。

これがラストチャンス。

…最後だ！

「【跳躍】！」

1度着地し、今度は天井まで跳ぶ。

そして、天井を…蹴って！

首に——！

「う…おおおお——ツ!!」

裂迫の雄叫びを上げ、二刀で突っ込む——！

「【黎明ノ弾丸】ツ!!」

…俺の剣と、ヤツの体は。

少しだけ、拮抗してから——

俺の剣が、ヤツの首を貫いた。

『スキル【血二飢エシ竜を獲得しました】』

その声で、目が覚めた。

「はっ……！」

…俺はどうやら、立ったまま気絶していたらしい。
ゲームかよ！…いや、ゲームだけだ。

ああ：いやいや、そんなことよりスキル：さっきのアレが使ったやつかな？

ブラッド・パーサー
血二飢エシ竜

INTの数値が0になることを代償に、STR、AGIの数値を3倍にする。効果時間は3分。クールタイムは8時間。

尚、INTの数値が0だった場合、デメリット無しで使用出来る。同様に、STR、AGIの数値が0だった場合、このスキルを使っても数値は0のままである。

…うわ強。

俺はINT上げてないからデメリット無しで使えるしな。

…え？

さっきのスキルはなんだって？

ああ、【黎明ノ弾丸】か。

あれは俺が取得したスキル、【黎明】の中のスキルだ。

…どういふことか分からない人も居るかもしれないから分かりやすく。

【黎明】というスキルは、それ自体がステータスツリーみたいになっているんだ。

スキル保持者のステータスが規定値まで上がれば、次のスキルがアンロック！

…ってわけだ。

で、【黎明ノ弾丸】は俺がアンロックしたスキルの中で一番強いスキルだったから使ったってこと。

さて、説明もしたし：帰るか：ん？

野郎が死んだ場所に奇妙な色の卵が置いてある。

モンスターの卵：かな？

あとさっきのアイツの鱗。

まあ、ありがたく貰うことにしよう。
さて、帰るか。

目を閉じ、ワープポイントに乗ると、ワープ特有の浮遊感が押し寄せ…

?!?!?!次に目を開いた時には元の場所に…ん？

「?!?!?!」

?!?!?!ん——？

知らない場所だなあ…

う——ん。

すううううう。

はあああああ。

…すうううううううう…

「なんでさアアアアアアアツ!?!」

レイン、オウチ、カエル

「へっ…くしゅん!」

「おいおいどうしたクロム、風邪か?」

「ここVR空間だぞ?」

「じゃあ誰かが噂してるとか!」

「なんでさ」

ちなみにレインはあの後、声を聞いてやって来たプレイヤー達に八つ当たりしたそうな。

…一方、その頃。

「うくん、レイン君遅いな…メイプル、見てない？」

「私は見てないなあ…サリーも見てないかあ…」

ピロン♪

メッセージの通知音だ。

「あつ、レイン君からだ」

「なにになに？」

二人がメッセージを覗き込むと…

『迷いました☆』

「……………」

t o b e c o n t i n u e d …!

閑話休題

これは少しだけ時を遡つての現実世界。

ゲームを運営する者達が不具合が出ないようにそれぞれイベントを管理している部屋でのこと。

「あああああああ!!【地竜】までやられた!」

一人の男が叫ぶ。

その声に部屋にいた全員が反応する。

「はあ?またかよ!?!あいつは無理だろ!プレイヤーが倒せるような設定じゃない!」

「ああ、とにかく防御力を上げまくった。弱点は設定したけどそこにダメージ入れるのも簡単じゃないし、メイプル対策に攻撃力をガン上げするスキルも付けた…まあつまり、オレたちの悪意の塊だ」

「誰だ?誰にやられた?」

「今映像を出す……」

男が機械をいじると一つのモニターに映像が流れる。

とにかくデカい、地竜。

相対するは、水色の羽織の少年。

「レイン!?またメイプル一味か!なんなんだよこいつら害悪じゃねえか!」

「嘘だろ!?!攻撃力が足りないはずだ!」

ありえないありえないと、言葉が飛び交う中で戦闘が始まった。

そして5分後…

「え…:はい。まず、【永久氷塊】な。これはチート級」

「誰だ作ったやつ」

「ゴレム担当したやつだろ」

「:お前ら、そっちもいいけどまずは【黎明】だろ…」

「:まさかこのスキル取れるやつがいたとはな…」

「おいお前、これの取得条件は?」

一瞬空気が静まる。

そして、意を決したように担当した男が…

「…自分の魔法を斬る」

……………。

「…バカじゃね？」

「バカだな」

「これもう取れるやつ居ないだろ」

「…あーもうめんどくせー！とりあえず【永久氷塊】は下方！以上！」

「ええっ!? 【黎明】はいいんすか!?!」

「そんなこと言ったらペインの【聖剣】も下方するべきだろ」

たしかに。

と、その言葉に納得する男たち。

「それより、お前らどうするよ」

「何がだ？」

「このままこいつをメイプルたちと合流させていいのかって話」

……………。

「さて、仕事に戻るか」

「そういえば幻獣の卵も持ってかれたな…」

「何持ってかれたんだ？」

「タヌキ」

「あれも十分強いんだよなあ…」

「おいお前ら！現実逃避すんな！」

「じゃあお前、どうするってんだよ！」

「…洞窟にあるワープポイントの行先をランダムにする」

「…マジかこいつ」

「…アンチみたいなことしてんな」

「なんとも言え。合流されたら【海皇】までやられるかもしれないんだぞ!?!」

「よしやれ」

「【海皇】まで倒されてたまるかよ！」

そしてワープポイントの行先を変えた男たちがモニターからレインを眺めると…

『なんできアアアアアアッ!?!』

と、叫ぶレインが居ましたとき。

そして時は少し戻り。

イベント終了の時がきた。

フィールド全体にアナウンスが鳴り響き今から五分後に元のフィールドに転移することになる。

そんな中、レインは…

「……………」

地面に大の字で転がっているが…

もはや喋る気力すら無くなっていた。

大声を出したため近づいてきたプレイヤー達の相手をずっとしていたからだ。

周りには、氷が呆れる程多くある。

途中から剣で倒すことすら面倒になり、スキル「永久氷塊」で閉じ込めて凍死させるという鬼畜外道戦法に走ったためだ。

「も…うや…だ…」
がくり。

チーン。

ついに力尽きて気絶した瞬間、レインにとってはかなり酷かった第二回イベントはついに幕を閉じた。

閑話休題②

「はあ……」

スキルを2つ選び終わり、お茶でも飲もうと街を歩く。

俺がメダルを使って選んだスキルは、「カウンター」と【解放^{バースト}】だ。

【カウンター】に関しては文字通り。

ダメージを受けた際、その攻撃の威力を次の自分の攻撃に乘せるスキルだ。

【解放^{バースト}】に関しては、常時発動型のスキルだ。

全ステータスを10%アップだと言う。

結構使えるスキルだ。

…? あんなにプレイヤーと戦ったのに銀のメダル10枚しかないのであった?

……いやあ、勿体ない事したよ。

最後の方はもうメダル回収がめんどくさくなって回収してないんだよね…

「…ていうか、テンションおかしくなってた時にメイプルさんたちに送ったメッセ…既読スルーされてたけど大丈夫かなあ…怒ってるよな…」

「大丈夫。怒ってないよ、怒ってない怒ってない」

「ははは。ならいいんだけど……」

…はっ!?

後ろには、いつの間に来たのか…

口は笑ってるが目は笑ってないメイプルさんとサリーさんが。

「怒ってないよ、うん。怒ってない」

「私もメイプルも怒ってないからさ。向こうでO☆H A☆N A☆S H
I☆しようか…」

「嫌だアアアアアツ！」

サリーさんが完全に俺をシメめる気だ！

メイプルさんに至ってはもう『怒ってないよ』しか言わなくなつて
る！

ポプテ○ピックかよ！

「…よし2人とも落ち着こうかおい待て早まるなちよま……」

…ギヤアアアアアアアツ!!」

…何をされたかは、俺の心が再び折れるので聞かないで欲しい。
ただ。1つだけ言うことがあるなら…

マジでトラウマもんでした。

542名前：名無しの大剣使い
イベント終わったな
話すことも満載だぞ

543名前：名無しの大盾使い
おう

まあまずはコレだな

《画像》

544名前：名無しの弓使い

うん：

うん!? (二度見)

545名前：名無しの大剣使い

フアツ!?

546名前：名無しの槍使い

おお

俺これ見てたぞ!

レインがメイプルちゃんとサリーちゃんに噴水に顔突っ込まされて溺れてたやつな!

547名前：名無しの魔法使い

何がどうしてこうなった

548名前：名無しの大盾使い

なんかレインくんが道に迷ったらしい
で怒られたんだと

549名前：名無しの弓使い

怒られたどころじゃなくて草

550名前：名無しの片手剣使い

おい：拡散してんじゃねえぞ

《名無しの大盾使い》さんよオ!

てわけでちわーつす。
本人です。

551名前：名無しの大盾使い
マジかw

552名前：名無しの弓使い
本人登場しやがったw

「はあ…寝るか…」

…俺はメイプルさんたちにめられたあと、すぐにログアウトし、
早々にベッドに入り眠った。

「……………」

そして早々に目が覚めた。

時計を見ると、今の時刻は10 : 35。
明日は日直の仕事をしなければいけない。
だから早く寝たいけど……

「……寝れねえ」

「寝たくないし、全然寝付けないけど明日は早いのだ。
寝なきやいけない。」

…かくなる上は！

自分で自分を締め上げて寝てやる…!

※真似しないでね!

そして1時間後。

「うぐぐぐ…あひゆう」

俺は死んだように寝て…いや。

気絶した。

突然、後ろから白峯さんと本条さんに羽交い締めにされる。

『エツ!?何!?何!?』

『ひひひ…雨宮ア…お前、カナヅチらしいな…!』

そして、水がたつぷりと入ったバケツをクラスメイトの男が顔に近づけてくる!

『な…ヤメロー!シニタクナイ!シニタクナイ!』

『お前最近さあ…白峯さんや本条さんと仲良いよなあ…?』

リア充がア!溺れ死ねえ!!』

『ちがーう!あの2人は…ゴボボボボ』

…そんないい人じゃないか…ゴボボボボボボボウ

…もはや俺のトラウマだゴボボボボボボボウア!?』

『へえー…私達が良い人じゃないって?』

『いつからそんな口を聞けるように…なったの?』

暗黒微笑を浮かべたメイプルさんとサリーさんはそう言うと、何処から取り出したのか、水が大量に入ったバケツを近付けて来て……!

「イイイイヤアアアツツ!!」

「ヒイヤアアアツツ!!」

…はっ!

ゆ、夢か…

なんてひどい悪夢だ!

トラウマ掘り返してきやがって……!

……っというか俺の他にも悲鳴が聞こえた気がするんだが……

ぐるりと自分の部屋を見渡すと……

「び…びっくりしたー…どうしたの兄さん…」

驚いてカエルみたいにひっくり返っている俺の妹がいた。

「…うん、ちょっと聞いていいか?」

「ん?なに?」

「……この溢れてるコーラは何かな?あとなぜ俺の部屋で映画を見て
いる」

床にたつぷりと溢れているコーラを指差しながら問いかける。
俺は昨日コーラなんて飲んでない。

つまり…

「あああつ！溢れてる！兄さんが驚かすからだよ！」

「人の部屋で飲むなよ」

「おうち映画にはポテチとコーラでしょ！」

「それはそうだけどさあ…」

……こいつは俺の妹。

雨宮凜だ。

毎朝俺を起こしてくる…

…これだけ聞くといい妹だと思えるかもしれないが。

起こし方は毎度毎度ヒップアタック。

毎朝死にそうになる。

『菜月、凜、ご飯よ〜』

のんびりとした声が響く。

お。

母さんが呼んでいる。

「ほら、行くぞ。飯だ」

「あ！お母さん、朝から兄さんのために頑張ってたよ？」

「何を頑張ったんだ…？」

「それはお楽しみという事で」

階段を登り、自室からリビングに向かう。

「おはよ」

「おはよう菜月、凜」

早速朝ご飯を食べるために自分の席に着く。

すると僅か二秒後。

ドンッ

「……母さん…何これ」

「すげえな菜月…お前の皿だけきのこの山じゃん…」

「父さん…端的にありがとう…で、このチョコじゃないきのこの山は何よ母さん?」

ちなみ俺はきのこが嫌いだ。大嫌いだ。

「菜月、きのこ嫌いでしょ?この機会に克服してもらおうと思って!」
「朝から嫌いな物で腹満たしたくないのでパス。ていうかこの機会に…今日なんかあったっけ」

そう言いながら、凜にきのこの山を回す。

「わたしに回さないでよー」

「ふっふ、青いな菜月。いつだってどんなときだって、今日という日の今この瞬間はここでもしか味わえないんだ。お前は同じような一日がまた訪れると思ってるかもしれないが、そうやって実は無数の『これだけ』って瞬間を見逃して…」

「今そういうのいいです」

適当に流して味噌汁を啜っていると、きのこの山が帰ってきた。

「…これ結局どうすんの?もう母さん食べてよ」

「でも、お母さんきのこ嫌いだし……」

「俺に食わせようとしてんのに!?!」

「あ、でも勘違いしないで。お母さんが嫌いなのはきのこだけじゃなく秋の食べ物全般だから」

「勘違いどころかもっと酷かったんですけど!?!」

そう言えば…母さんがごぼうとか食べてるの見た事なかったな。

ならばー

「じゃあ父さんが食ってよ」

きのこの山を父さんに押し付けつつ言う。

すると…

「…菜月…母さんが嫌いで、お前も嫌いな物をオレが好きだと思うか!?!」

「あ、はい」

そして結局俺の元に戻ってくるきのこの山。

…もう最後の希望に賭けるしかない！

「凜、お前は「やだ」…ほんとに誰も幸せにならねえなこれ!？」

誰も食わないじゃん！

「仕方ないな。じゃあ、みんな大好きチキンライスに入れてやるぜ！」

「あんたも食わなかっただろうが…」

「はいそこ！ちよつと黙って」

結局。

父さんが作ってきたチキンライス…いや、『きのこライス』と化したものは俺と父さんで処理した。

「急がないと…!」

俺は今、きのこの山のせいで時間の余裕が無くなったため、急いで準備中だ。

「行ってきまーす!」

「あ、兄さん!」

「どうした凜。何かあったのか?」

「なんか昨日ショッピングモール行ってガラガラやったらVR当たった」

……………え。

!?

「…マジで?」

「マジで」

マジかこいつ。

その幸運ちよつと分けて欲しいわ…

「…えつと、それで何?」

「兄さんがやってるゲーム、わたしもやってみる」

……マ
ジで？

お前も人外だ

「…ってことがあったんだよ」

「なるほどね…妹さんがゲームを始める、と。それがどうかしたの？」
あれから約30分ぐらいが経過し、今俺は学校で白峯さん、本条さんと今朝のことについて喋っている。

え？昨日のこと？知らんな。掘り返すんじゃない！

…話を戻そう。

「…俺の妹さあ…多少は家族鼻入ってるかもしれないけど、普通に俺よりプレイスキルあると思うよ？」

そう。うちの妹はヤバいのだ。よくアニメで見るとような動きを素の身体能力でこなすんだぞ？

バク宙とかね？

「多分あいつがゲームに慣れてから同じ装備で戦ったら俺が負ける」

「そんなに!?!」

「あと頭のネジが5本ぐらい外れてる」

「…あ—…」

二人も察したらしい。

ていうか本条さん、あんたは人のこと言えないからね!?

…オホン。

つまるところ、本条^頭さん^おのよう^かな人^いがまた増えるということだ。

「で、話は変わるけど。本条さん最近ゲーム内の知り合い増えてきたでしょ?」

「うん!クロムさんに、イズさんに、カナデに、カスミ!」

「ほうほう。知り合いが増えるというのは素晴らしいことだねえ、本条大佐」

カナデとやらは知らないが、俺が迷った時に知り合ったっばいし、掘り下げないでおこう。

「はい、その通りであります!」

「なにやってんの2人とも…」

「そこでだ。我々もそろそろ腰を落ち着きたい。なので——」
白峯さんをスルーして話を続ける。

…そう。

仕方ないとはいえだ。

なぜわざわざ人外3人を一人で相手にしなくてはならないのか。

そう考えた俺は——

「ギルド作らない?」

知り合いを巻き込むことにした。(ゲス野郎の鑑)

その後。

本条さんが珍しく授業中にぐっすり眠り、起こされた瞬間にかなり大きい声で「もう見張り交代?」とか言ったり、体育の授業でドツチボールをやった時に「カバームーブ!」と叫んだりしていて、思わず笑ってしまった。

まあそんなことはさておき。

今日は凜がログインする。

…いやな予感しかしない。

アイツは絶対に何かやらかす。間違いなく。絶対に。

今はログインしてキャラ設定をしているアイツを待っているが、武器も何を選ぶか想像がつかない。

「…うーん…あつ、いたいた!兄さーん!」

「…!?ブフウ!」

「…?どうしたの?」

「…ゲーム内では兄さんって呼ぶな。キャラクターネームで呼ぶんだ。俺はレインな、お前は?」

「リン」

「えっ」

…ほら早速やったよ!リアルネームで登録するか普通!?

「よ、よしリン。武器は何を選んだんだ？」

「杖だよ。でもゆくゆくは全部使いたい！」

…杖か。俺は近接だから相性はまあまあ良いかな。

「ちなみに初期ステータスは？」

「MPと…INT?に半分ずつ振ったよ」

…what?

「…マジで言ってるの?」

…え?またAGIゼロの爆誕?

「うん、マジマジ。…なんかまずかった？」

ええ…思わず頭を抱えるレベルだぜこいつあ…

「何故俺の周りには頭おかしい人ばかり集まるのか…」

「類友つてやつじゃない?ていうか失礼だなあ」

「お、お前な…俺まで頭おかしい人判定しないでくれる?」

「えー、でも第二回イベントのアーカイブ見た限り、兄さんも相当頭お

かしいと思うよ?」

う、嘘だ…そんな…!そんなバカな…ツ!

「…俺もツ!人外だと言うのかツ!」

崩れ落ちて血を吐くように叫ぶ。

「いや、そこまでは言っていないけど」

「あ、はい」

気を取り直していこう。

またもや俺はAGIゼロの面倒を見なくてはいけないと。

……ごめん。正直に言わせてもらおうと超めんどくさいわ。

この役ほっぽり出して逃げたい。

「ねえ、ちよつと聞きたかったんだけどさ…」

「ん?どした」

「…兄さんの頭の上に乗ってるそのタヌキはなんなの?」

「え?…ああ、こいつね。こいつは…」

たぬきちだ!」

「なんでど〇森!?!」

「思いつかなかったからな、名前。」

ま、冗談はさておき。こいつは第二回イベントでボス倒した時に出
てきた卵から産まれた…タイムモンスター?…だな」

そう。俺の頭には今タヌキが乗っている。

あの地竜を倒した時に落ちた卵のやつだ。

こいつはどうやらメイプルさんのタイムモンスターであるシロツ
プとは少し異なり、プレイヤーを支援するタイプのやつみたいなんだ
よな。

今習得してるスキルは【感覚共有】だけ。

ただしこのスキル、偵察などで大活躍する。

【感覚共有】スキルは、その名の通り俺とたぬきちの感覚を共有する。
例えば視覚。たぬきちのしているものを俺も見ることが出来る。

単純だけど強力なスキルだ。

そのことを説明すると、リンは目を輝かせた。

「わたしもタイムモンスター欲しいな〜!」

「頑張りたまえ、少女よ」

こいつはほんとにすぐタイムモンスターをゲットしそうで怖い。

さて…じゃあ俺は…

「じゃあ、俺はギルド設立のために【光虫】探しに行くから…」

サリーさんとギルドホーム建設の為の【光虫】を探す約束を今日は
取り付けてある。すっぽかしたら多分俺のギルド生活終わるナリ。

そう言つてさりげなく逃げようとする。

ガッシ。

「待って」

STRゼロとは思えないほどの力で肩を掴まれる。

「…おい、何してんだよ? 離してくれ、さもないと明日学校で白峯さん
にしばき回された挙句にギルド内での立場が底辺になる」

「行かせないよ、なに逃げようとしてんの。」

わたしたちは…兄妹じゃん…地味なレベル上げだろうとなんだろ
うと…

逝く時は一緒でしょ?」

「…ええい離せ!こんな時だけ兄妹の絆を主張するなあ!」

「兄さんが学校でしばき回されるとかギルド内での立場とかどうでもいいから早くレベル上げ行くよ!」

「お、おま…今とんでもないことを口走りやがったな!?!お前にとってどうでもよくても俺にはよくねえんだよ!」

掴み合いが始まる。

だが俺は失念していた。

ここが第一層の広場であることを。

まあつまり…人がめっちゃ居ることを。

「お、おい。あれ【狂人】って渾名のレインだよな」

「初期装備の子をカツアゲしてるぜ…さすが【狂人】」

「どーという意味だコラー!!」

誰が狂人だコラ。ぶっ飛ばすぞ。(こういうところ)

「おい、聞かれてんぞ!」

「逃げるぞ!」

「ふっふーん!傍から見たら兄さんは初めたばかりのプレイヤーにカツアゲしてるようにしか見えないのだよ!」

ドヤ顔でリンが言ってくる。

「ぐぐぐ…作戦負けかよ…!」

この後めちやくちやレベル上げた。(リンの)

ついでに翌日、めちやくちやしばき回された。

そう、DO☆GE☆ZA☆です。

あれから三日間たった。

リンは良いクエストを見つけたとかでどこかへ行つた。あんだけ振り回しておいて俺を置いていきやがった。自由すぎる。

そして、どつかの誰かさんに振り回されて行けなかった【光虫】探し。

あれはサリーさんが一人で終わらせたらしい。マジですいませんでした：

さて。

それはそうと、今日はメイプルさんがゲームに戻ってくる日だ。ほら、前に言つてただろ？

学校で『もう見張り交代?』とか【カバームーブ】とか叫んだやつ。あれがあつたから、ゲーム休んでたらしい。

だがもう失敗しなくなったから戻つてくると。

ちなみに、【光虫】は手に入れたが、ギルドホームはまだ購入してないらしい。

サリーさんはメイプルと一緒に選びたいって言った。多分今選んでるだろう。

俺には選ばせてくれないのと言つてみたら、笑顔で威圧された。予想はしてたけどかなり酷い。

…え？

今俺は何してんのかって？

リンを待っている。

いや、正確に言えばメイプルさんがギルドに誘おうと思つていた人呼びつけ終わり、メイプルさんとサリーさんを待っている状態なのだ、リンが来ない。

あいつ…遅刻しやがって…え？何？人外どもあんたらは揃いも揃つて俺の胃を破壊しようとしてるの？

あくしろよオオン!?

そろそろクロムさんたちとの会話の話題が無くなって微妙な雰囲気になっちゃうからさアアアツ!

「あ、兄さーん!遅れてごめーん!」

「!この間延びした声!何よりゲーム内で人のこと兄さんとか呼ぶ頭のおかしさ!」

間違いない!リンだ!

「ハア!兄さんって呼ぶな。:それはそうとリン、遅いぞ!え?」

若干アホっぽい声に振り向いてリンの方を見ると――

「ふふん、どう?新しい装備!」

――何だかなり強そうな装備に身を包むリンがいた。

「:その装備は」

「良いクエストがあったって言ったでしょ?それで」

「:で?どんなキチガイ装備なわけ?」

「なぜに既にキチガイ認定!」

どうせそうだろ、コイツだし。

メイプルさんとかと同じ部類の人間だよキミは。

目を少し離すと付属品がどんどん増えるとか全く同じ。

「ハア!全くお前は!なぜユニークシリーズっぽいものばかり手に入れるのか!」

「おまいう」

「えっ」

みんな、こんにちは!

リンです!

兄さんと話していると長くなりそうだから、わたしの装備については

わたしが解説します！

じゃあ、とりあえず今のわたしのステータスを見せるね。

リン

Lv34

HP 232/232

MP 162/162

【STR 55 へ+64 へ】

【VIT 0 へ+43 へ】

【AGI 30 へ+25 へ】

【DEX 0】

【INT 50】

装備

頭 【空欄】

体 【純白のコート・Ⅳ】

右手 【錬鉄の小剣・Ⅴ】

左手 【錬鉄の小剣・Ⅴ】

足 【空欄】

靴 【ホワイトレザーブーツ・Ⅲ】

装飾品 【革のホルスター】

【空欄】

【空欄】

スキル

【状態異常攻撃Ⅲ】 【スラッシュ】 【疾風斬り】 【筋力強化大】

【連撃強化大】 【ダウンアタック】 【パワーアタック】 【スイッチアタック】

【体術Ⅳ】 【ヘイスト・シフト】 【接続^{コネクト}】

【片手剣の心得Ⅴ】 【両手剣の心得Ⅲ】 【弓の心得Ⅲ】 【メイスの心得Ⅲ】

【大槌の心得Ⅲ】 【槍の心得Ⅲ】 【杖の心得Ⅲ】 【大盾の心得Ⅲ】 【投擲武器の心得Ⅲ】

【鞭の心得Ⅲ】 【銃の心得Ⅳ】 【大鎌の心得Ⅲ】

【火魔法Ⅰ】 【水魔法Ⅱ】 【風魔法Ⅲ】

【土魔法Ⅰ】 【闇魔法Ⅰ】 【光魔法Ⅱ】

【ファイアボール】 【ウォーターボール】

【ウインドカッター】【サンドカッター】
【ダークボール】【リフレッシュ】
【MP強化小】【MPカット小】
【MP回復速度強化中】【魔法の心得ⅠⅠ】
【気配遮断ⅠⅠ】【気配察知ⅠⅢ】【しのび足Ⅱ】【跳躍Ⅲ】
【剣ノ舞】

…どう？

え？装備がバケモンすぎるって？

そう！そうなの！

この装備、兄さんにも言った【良いクエスト】で手に入れたの。
そのクエストがどんな感じだったかって言うところ…そうだね…

依頼人は鍛冶屋のおじさん。

なんかよく分からないけど、腕がいい人に自分の武器を使って欲しいみたいだったよ。

クエストの内容は、その装備を使ってダンジョンクリア。
たくさんの武器を使わせてくれたし、結局ほとんど貰っちゃったし。

なんでこんな簡単なクエスト、みんな受けないんだろ？

どこが簡単なんだこのド畜生がアーツ！

そこから詳しく聞くと、なんとレベル60越えのボスと戦いまくっ
たらしい。

しかも、剣（片手剣に両手剣、しまいには双剣まで）・メイス・槍・
ハンマー・杖・大盾…そしてその他もろもろに、果てには銃まで。

その装備を使ってそれぞれ1回ずつダンジョンをクリアするのが
条件らしい。

…本当に何を言っているんだこの愚妹は。

え？バカなの？バカなの？

いやバカだわ。

こいつは恐らく、いや間違はなくこのゲーム1のバカだ！

しかもこいつ自分の異常性に気付かずにアホ面晒してるんだぞ？

なろう系主人公か貴様は！

『え？また自分なんかやつちやいました？』

とか言っつてそうだな！

「…ハア」

…ちなみにメイプルさんが集めたメンバーは、カスミ、クロム氏、イズ氏、カナデつて人。

…そしてウチの愚妹。

「なんだコレ人外魔境じゃねえか」

あれっ。人外しかいなくない？

それにしても、だ。

今頃運営さんは慌ててるかなあ。

リンがやべえクエスト完全攻略しちゃったし…

…すいません。

ウチの愚妹がすいません。

「あ、兄さん！メイプルさんたち来たよ！」

…すいません。

こんなバカみたいなギルド作つてすいません。

…多分メイプルさんが提案したと思つてますよね。

俺です。俺がやりました。本当にすいません。

「あ、レインくん！ギルドホーム買つてきたよー！」

…すいません。

ウチの仲間がすいません。本当に、本当にすいません…

「…どうしたの？いきなり座つて…」

俺は心から運営への謝罪を敢行した。

ジャパニーズDO☆GE☆ZA☆である。

後に愚妹は語った。

それはそれは立派なDO☆GE☆Z☆Aだったと
やかましいわ。

運営の受難

レインが土下座を敢行する少し前。

現実世界にて、【New World Online】を運営する社
会人たちは今――

「なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？なぜ？

理解できません。なぜ？」

「考えるな、感じるんだ」

「もうダメだあ…おしまいだあ…勝てるわけがないよおつ」

精神的にやられてしまっていた。

唯一現実を直視しているのは課長。

しかし同時に、このギルドの『ヤバさ』を理解していないのも課長
だった。

「ふう…そんなに大変なのか？メイプルは集団対集団では力をあまり
発揮できない。広範囲の毒が主体だからな、周りを巻き込みまう。
メイプルの対人火力を抜きにしたらあまり…」

「さてはあんたバカでしょ、バカですね」

「頭おかしいっすね課長」

「君たちは立場の差をもっと恐れて？君たち平社員だよな？」

課長が温厚でなければ物凄く怒られるところだ。

「あのですね、まあ確かにメイプルたちだけなら別にいいです。そ
りゃギルド作ることもあるでしょう」

「ふむ」

「問題はレインとリンです。あの2人頭おかしすぎるんですよ」

「ふむふむ」

「まずレイン。攻撃力、敏捷性ともに全プレイヤートップクラス。
めっちゃ強いです」

「ほうほう」

「そして例のあのクエストを全クリしたリン。こいつに至っては頭が
おかしいとしか言えません。しかもノーダメでクリアしやがりました

た。害悪そのものです」

「うっ……！胃が！」

突然胃が痛み始め、腹を押さえ蹲る部下を見て課長は——
「なるほど。だが大丈夫だ、俺たちには心強い味方がいる」

「心強い……味方……？」

「そいつは……一体……何者なんだ……!?!」

「そいつは体が褐色で頭がオレンジでな、趣味はラツパなんだ」

「——バカッ、それラツパのマークの正露〇じゃねーか！」

「それは心強い味方じゃなくて敗戦処理だよ！このアホ課長が！」

「やっつけられつかアアアアッ！」

「君たち立場分かってる!?!」

——と、もはや全員が落ち着きを無くした瞬間。

「……え？……え?!?!」

「ど、どゆ……どゆこと!?!」

「レイ……レイン!?!」

そう。モニターの中でレインがDO☆GE☆ZA☆を敢行したのだ。

………運営がプレイヤーを見るために設置されているカメラから角度が180度ほどズレていたが。

「こ、こいつ……なんて美しいDO☆GE☆ZA☆なんだ……！……尻しか映ってないけど」

「ああ、全くだ……！……尻しか映ってないけどな」

「こいつ……さぞかし名のある将と見た……！……尻しか映ってないけど」

「やめてあげて！レインくんのライフはもうゼロよ！」

結果的に、レインのお陰でやる気を取り戻した運営たち。

「課長」

「ん？なんだ？」

「正露〇ください」

だが運営の受難はまだまだ終わらないのだった。

ぽかあ悲しいよ

あの、俺にとっての最悪の日から二週間。

ちなみに余談だが、この二週間の間にメイプルさんが天使（比喻表現ではない）になつたり、クロムが人外（これまた比喻表現ではない）になつたり、STRに極振りした女の子二人が入団して早々に机をぶっ壊したりしたが、気にしたら負けだ。

話を戻そう。

今日、第3回イベントが始まった。

今回のイベントは、フィールドに出現した牛型のモンスターを討伐して、ドロップしたアイテムを集めるという、実に単純なイベントだ。ちなみに、集めた数で個人報酬とギルド報酬が得られ、個人報酬はランキングに応じて追加がある。

フィールドモンスターを狩るだけだから、やっぱりAGIが高い人が有利だな。

このギルドだと、俺、サリーさん、カスミ。

…え？リンもAGI寄りじゃないかって？

残念なことに、ヤツは今回のイベントでは使い物にならない。

なぜなら――

「ちえるーん♪」

ソファにドカリと座って、殴りたくなるドヤ顔をしながら意味不明の言語を喋っているからだ。

二日前。二日前からだ。凜はコロコロ趣味が変わる。今度は何にハマったのか、家でもこの言語しか喋らないのだ。まさに狂気の沙汰。さもありなん。

「ちえるーん♪ちえるちえる、ちえちえるば、ちえるるるん！」

ちえらるれ、ちえらちえら、ちえるちえばびっ。」

何を言っているんだコイツは。

「日本語喋れ」

「……………」

はい、日本語には反応しませんと。殴るぞ。

「ちえるーん」

「……………」

ノリノリじゃないと反応しないってか。ぶっコロすぞ。

「何してるの？」

今来たらしいサリーさんが声をかけてくる。

「コイツが意味不明の言語を…」

「ちえるーん♪」

「へえ…私ちよつと分かるよ」

……………なん……………だと……………!?

「翻訳して」

「んー…じゃあ、ちよつとヒントを」

「翻訳してくださいお願いします」

「だが断る」

「ちくしよおおっ！なんでじゃあつ！」

思わず膝から崩れ落ちる俺。

「まあ待って。キミにこれを進呈しよう」

そう言ってサリーさんが渡してきたのは何かが書いてある紙。

なにになに…？

① ちえるちえらちえぼーん。

② ちえるらばるちえるれ。

③ ちえるりれろりろりろ。

……………えっ？

「何これ」

「この3択のうち、一個答えるといいよ」

「わけがわからないよ」

「キュウベえはやめよう？」

はあ…あざっす。

「なんて書いてあるかさっぱりなんだが…」

「ちえるーん♪ちえるちえる、ちえちえるば、ちえるるん！

ちえらるれ、ちえらちえら、ちえるちえぽぽ？」

さつきと全く同じ文を読むリン。

よし、じゃあ――

「ちえるりれれろりろ」

さあ、どうだ！どんな反応を示す!?

「ハ？何言ってるの突然…信じられない、最ッ低…」

「なんでさ」

それは 罵倒というには あまりにも直球すぎた

慈悲なく 容赦なく 手厳しく そして正直すぎた

それは 正に 痛罵だった

……俺は今なんて言っただ？

リンがドン引きして標準語に戻るレベルの一言…え？いや分からん。

「ちよつと待って、今俺はなんて言っただ？」

そう聞くと、なぜかサリーさんは顔を逸らして。

「……言わせないでよ恥ずかしい」

「言うのが恥ずかしいレベルのこと言ったの俺!?ていうか言させた本人が何言ってるの!?!」

「私はヒント出したただけだもんね」

「ぐぐぐ……はあ。で？結局俺はなんて言っただの?」

「……じゃあ紙に書くから、それ貸して」

そう言われてさつき渡された紙を返す。

そしてふとリンを見ると、自分の体を抱いてこつちを睨んでいた。

ほんとになんて言っただ俺は。

「……お待たせ。はい」

サリーさんが紙を渡してくる。

さて、俺はなんて言っただ？

そう呑気に考え、紙を見て――

『【ぶち犯すぞ】って言ってたよ』
ぶち殺すぞ。

」
紙を無言で思いつきり破く。

「そ、そんなこと言う人だとは思ってなかった…」

黙れクソアマ1号。適当なことほざいてると見た目が超キモいモンスターの口の中に頭から突っ込むぞ。

「あ…あのー、レインくん？大丈夫？」

黙れクソアマ2号。日本有数の心霊スポットに縄で縛ってから放り込んで一日中放置するぞ。

はあ………もういい。このクソアマどもを殺して俺も死のう。

「……頭部は野犬に食わせるとして…」

「なんか凄い怖いこと言ってるんだけど!?!逃げるよりリンちゃん!」

「ちよっ、やめ…!いい、いやあ、来ないでええ!嫌あ!ひぎいいい!」

数分後、ギルドホーム内に2つの悲鳴が響き渡るのだった。

真面目にやろう？・そろそろ

「というわけで、そろそろ真面目にやらない？」

「何がというわけなのか分からないけど、そろそろ第四回イベントだよね」

「聞いた上で速攻話題変えるのやめてくれる？」

結構切実な願いなんだが、コレ。

「えー……じゃあ偵察してきて」

サリーが面倒くさそうに言う。

「どこの？」

「炎帝の国と集う聖剣」

二強じゃねーか。

見つかったら即殺されそう。

「あんたらは？」

「湖行って遊んでくる」

遊ぶんかい。

拜啓。

皆様、いかがお過ごしでしょうか。レインです。

突然ですが、今私はサリーから預かった任務を遂行中です。

「ねえ兄さーん、お腹すいたー」

何故かこのバカもついてきていますが、放っておきましょう。

それにしても、です。第三回イベントが終わって、改めて思ったことが。

「このギルドはおかしすぎる」

「急にどしたの……？」

いや、おかしいです。絶対におかしいです。

第三回イベントで何をやらかしたのかクソデカ悪魔になれるよう

になったメイプルさんを見て、私は再認識しました。

「このギルドはおかしい。変人と変人とただのバカが混ざってカオス状態だ」

「自己紹介……?」

「ぶん殴るぞ」

もうこの口調やめよう…

で。今俺は、ギルド『集う聖剣』の監視もとい偵察中だ。

今まさに狩りを行なっている三人のプレイヤーを観察中。

ペイン、ドレッド、ドラグだ。

「あれ、金髪の女の人は?」

「フレデリカな。知らん」

実際どこにいるのかはほんとに知らん。

「ウチの偵察でもしてんじゃねーの」

「え、やばいじゃん。いいの?」

「サリーいるから大丈夫でしょ」

適当に返す。

サリー、メイプルさん、マイ、ユイは今、湖で呑気に水遊び中だ。

呑気に水浴びしてるところ偵察したって意味ねーだろ、タイミング

悪かったな。ざまあ。

「それはそうと兄さーん……お腹すいたー!」

体をガクガク揺さぶってくる。

うっわめんどくせ。

俺の経験則から言って、ここで放置したりすると後々かなりの報復をされる。

頭はいいからなのか、的確に俺が嫌がることをしてくるのだ。

縛ってスプラッタ映画耐久とかな。ちなみに寝たら往復ビンタで起こされる。

やったことに対して報復のレベルが釣り合っていないだよ。

つまりだ。こういう時は……

「ほれ」

ストレージからクッキーを出してポイツと投げておいた。

こういう時は大人しく何かを与えれば黙る。

「やったあ、ありがとう！」

「あつバカ！」

このアマ、だいぶでかい声出しやがった！

「ん…今なんだか声がしなかつたか？」

ほらみる、ペインに気づかれてやがる。

俺は逃げるぞ！

「えっ、ちよつと兄さん？」

ファストトラベル

「瞬間移動…！」

スキル名を唱えた瞬間。景色が変わり、俺はギルドハウスへと戻ってきていた。

このスキルは、俺が前回のイベントの報酬で獲得したスキル。

一度行ったことがあるところへ一瞬で行けるというものだ。

その分クールタイムも長いし、何より自分しか転移できないけど。

そう、自分しか！転移できないのです！

つまり、俺はこのスキルを使って脱出できたが、リンはあの場所に置き去りだ。

安心しろリン、骨は拾ってやる。

お前が好きな棺桶ダンスもしてやるから、許せ。

その後、怒ったリンに縛られてからバイオハザードシリーズを全部ぶっ通しで見せられたのは別の話。

唐突な変人出現。勘弁してほしいね

「ふう」

消滅していくモンスターを見ながら息を吐く。

第四回イベント開始まであと1日。俺は、一人で最後のレベル上げをしていた。

……していた………んだけど、さ。

さつきから視線を感じるんだよね。

なんとというか……ずっと。レベル上げ始めた瞬間から。

「いつまでも見てないで帰って欲しいんだけど……」

「……あらら、バレてたん？ 気配の察知まで一流なんて、余計惚れてまうわ……」

「勘弁してくれない？」

なんだコイツ。ていうか、変人の気配ってやつを感じるんだが、逃げた方がいいかな？

木の陰から出てきたのは、メイプルさんと同じくらいの背丈の女の子。
こういうゲーム特有の露出が多い服を着ていた。

「なんだその格好、誘ってんのか」

「うちのこと気になるんらかまへんよ？ ほら」

「冗談だよ、本気にすんなバカ！ 俺はロリコンじゃねえ!!」

丈の短いスカートをピラつと捲り始めたので冗談もほどほどに叫ぶ。

「あははっ。あんたはん、初々しいなあ」

「ほっとけ。で、なんで俺をつけ回すんだ」

『楓の木』の偵察なら俺じゃなくてメイプルさん見てくるだろうし。

そう俺が言うと、少女はこちらを指さして。

「あんたはんを……」

「あ……あんたはんを？」

「蕩かして、うちのもんにしたいたいから……♡」

少女は恍惚とした表情でそんなことを………ヒュッ

アイエエエエエエエエなんでエ!?なんで俺え!?

ぞわり、と背筋が凍る感覚。

恐怖だ。

俺のなにいって言うのかは全くもってわからないが、この少女は俺のことを独占したいらしい。

「お……俺よりいい感じのやつはいなかったのか？」

「うち、イケメンが好きやからなあ。女子おなごはねえ」

「じゃあ……クロムとかは？」

容赦なくクロム仲間を売っていくスタイル。すまねえクロム…。

頼む、クロムで満足してくれ!

「うちはあんたはんが良いんよ?」

駄目だったああああああ!? (錯乱状態)

………ふう。落ち着け。

まだ策はあるぜ!

たった一つだけ策はある!とっておきのやつがな!

いいか、息が止まるまでとことんやるぜ!

「あんた……名前は何？」

「わざわざ聞いてくれるなんて嬉しいわあ。うちは、イオリ」

「知ってると思うけど、レインだ。じゃあ俺は帰る」

「あつ」

(さりげなく) 逃げるんだよオ!

少し早歩きでイオリが見えなくなるまで歩いた……その時だった。

「もう、いけず」

「ホワイジャパニーズピーポー」

柔らかい感触。抱きつかれてるみたいだ。

俺に正面から抱きついてくるのはさつき振り切ったはずのイオリ。

……………。

あ……ありのまま今起こったことを話すぜ!

《俺はイオリが見えなくなるまで歩いたと思ったらイオリのところに戻っていた》

な……何を言ってるのかわからねーと思うが、俺も何をされたのかわからなかった…。

頭がどうにかなりそうだ…催眠術とか超スピードとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。

もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…。

【瞬間移動】ー!!」
ファストトラベル

恐怖に逆らわず転移を行使。

瞬間、景色が入れ替わった。

そこはすでに、ギルドハウスだった。

もちろんイオリはいない。

「つだああ……はあつ、はあつ、はあつ……」

な……んだったんだ、アイツ……!

俺とイオリは戦ってない。でも……分かるんだ。

アイツと戦ってたら絶対負けた。

それくらい恐ろしかった。

途中ふざけてたのはただの現実逃避、そして空元気だ。余裕はなかった。

「このままじゃ……ダメだ」

イベントまであと1日。イオリが参加するかは分からないけど、何か用意しなくちゃな……

時計の針が、ちょうど夜の9時30分を指した時だった。

少女はVRゲーム機を頭から外して、かなーり大きなベッドで転がり回る。

「レインさんイケメン！映像で見たのよりかなりイケメン！付き合いたい結婚したいーい！」

少女はレインの大ファンであった。

そして、それを諫める者が1人。彼女の執事だ。

「伊織様、女性は結婚したいなどと軽率に口に出すのはいけませんよ」「いいでしょう別に。私の勝手でしょう？……ふああ……」
大きなあくびをする少女。

「今日はもう寝るね。おやすみ、空」

「おやすみなさいませ、伊織様」

執事は部屋のドアを丁寧に閉め、自分の部屋へと戻る。

「さて……………」

……………レイン……！伊織様に軽々しく近付く害虫め……………！明日は二度と伊織様に近寄れないようボコボコにしてくれるー！」

部屋が防音だということの良いことに、物騒な事を叫ぶ執事だった。

「……ヒッ」

「……兄さん？わざわざ買ってきたのに食べないの？そのハーゲン
ダッツ」

「いや、なんか悪寒がしてな。もちろん食——」

「食べないならもちやうね！いったただつきまーす！」

「聞けよ。てか食うな、俺のだぞ！」